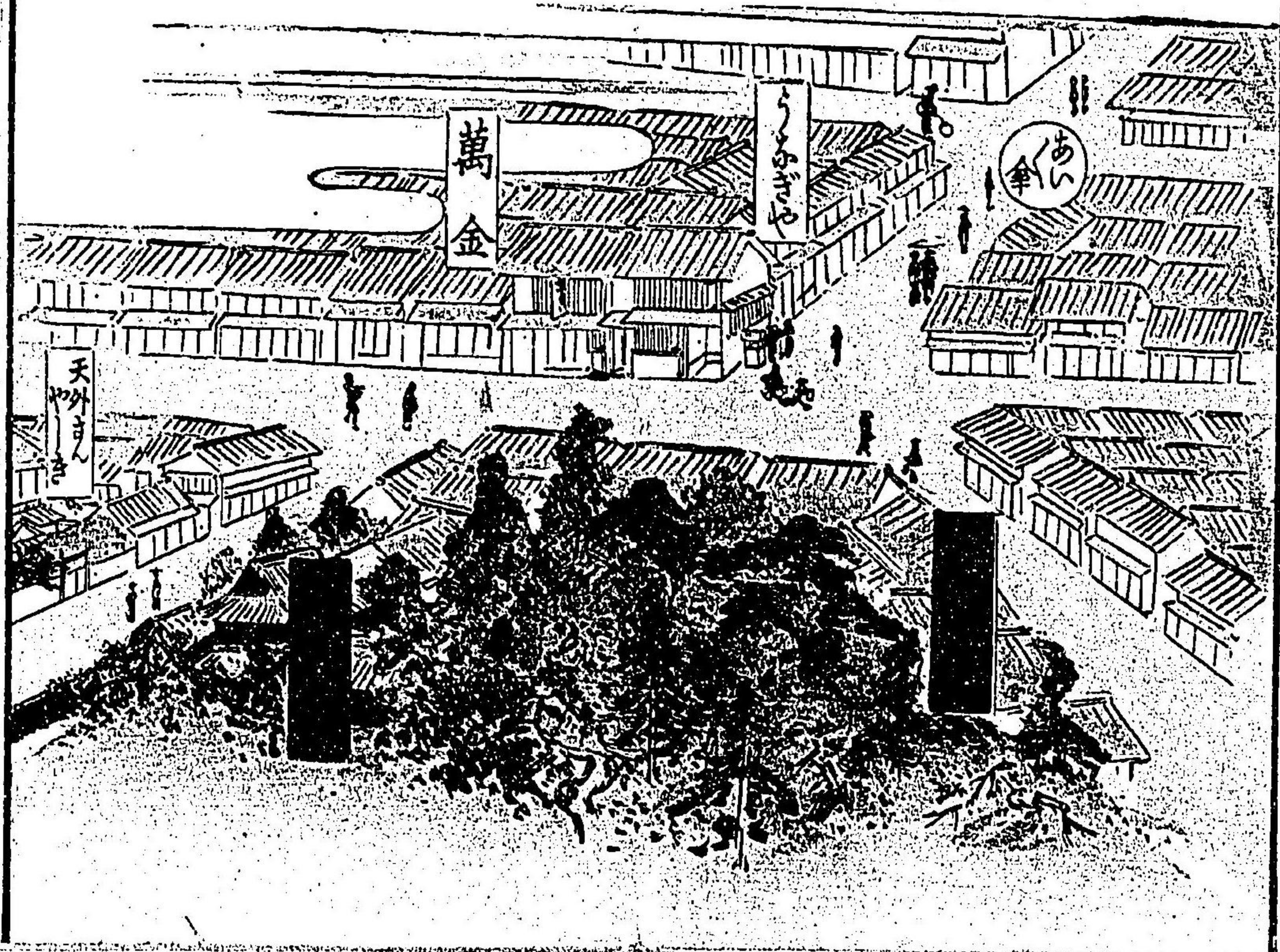


通夜物語

泉鏡花著
春陽堂版



301738000-1

別—1

通夜物語
泉鏡花／著

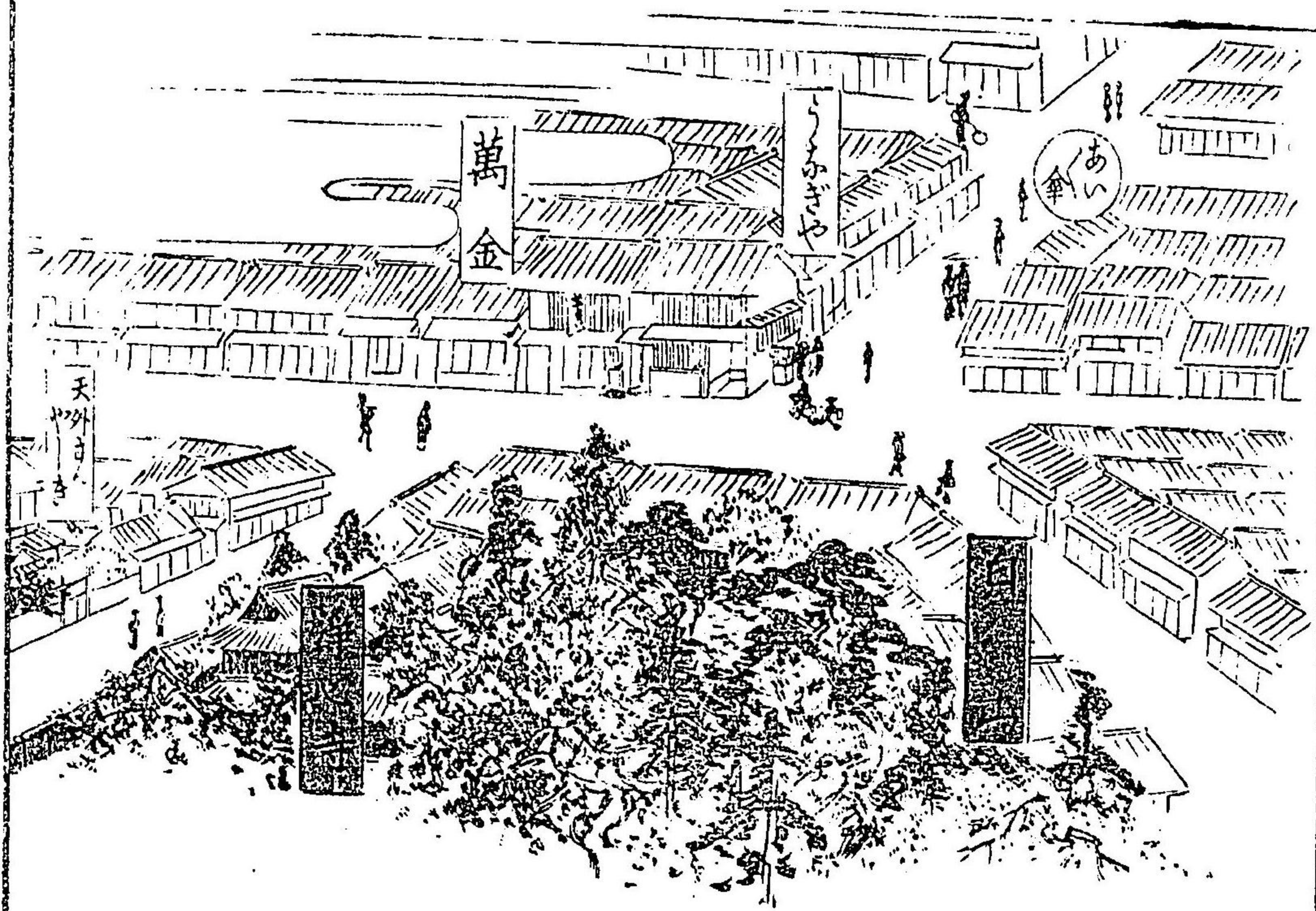
M34

DBQ- 36



通夜物語

泉鏡花著
春陽堂版



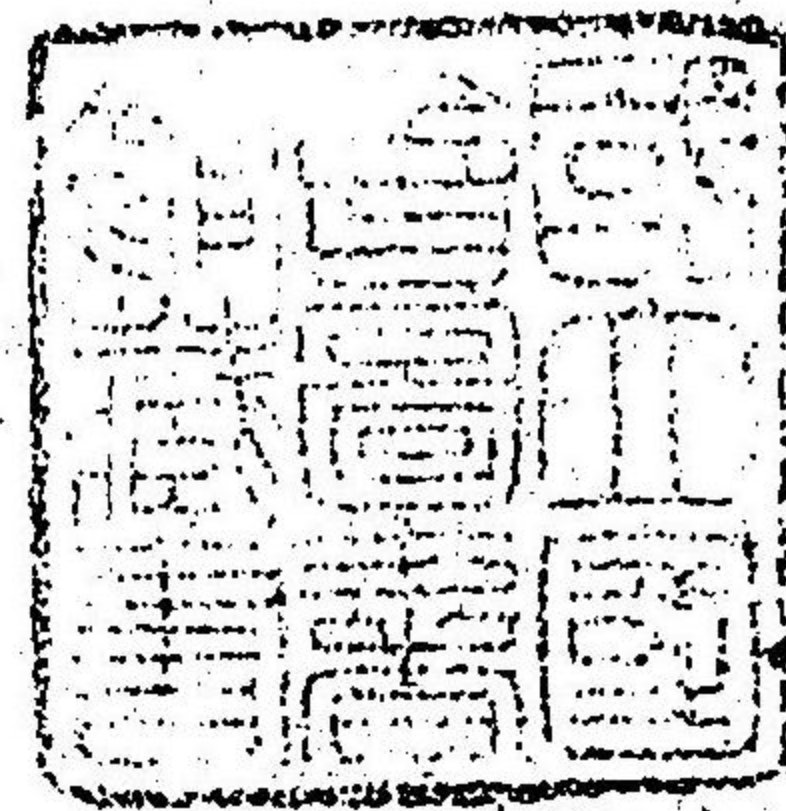
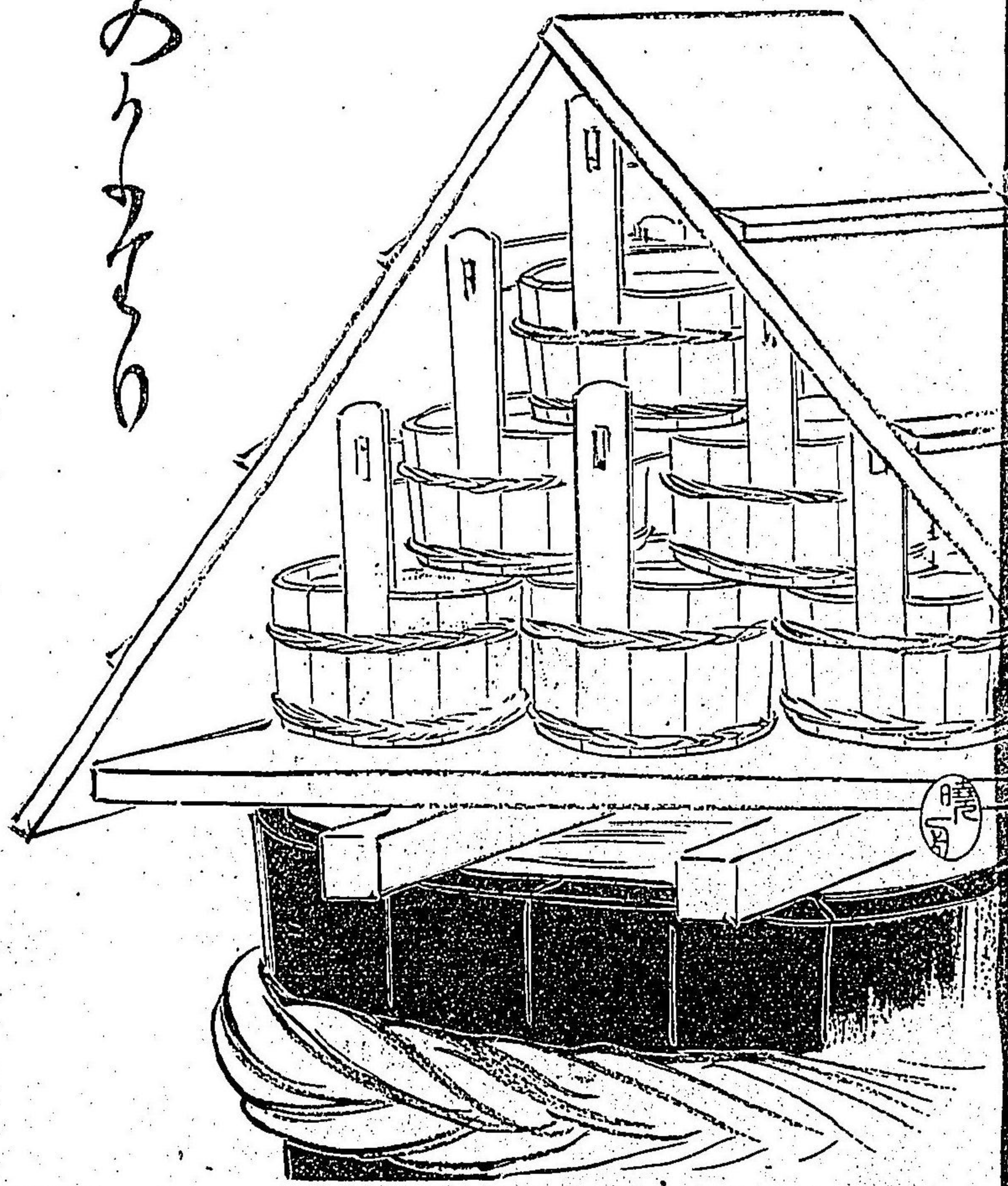
通古為語

通古為語



F13
I.99
6a1

通
子
茶
書



U 32170



鏡花小史著目録

通夜物語	照葉狂言	湯島詣	錦帶記
湖のほとり	辰巳巷談	高野聖	黒百合

通夜物語

第

泉鏡花

(一) 通夜物語

「鍋焼燗」
 駒込白山の阪の上、千駄木へ曲らうといふ辻の角で、小雨の中で唐突に節を附けて呼んだ。この聲は、東京の町々、淺草邊、兩國の橋の袂、藝妓新道、場末の裏小路さては大川端、到る處に、戀には限らず、冬の夜を寝もやらぬ、人々の耳に、其の思ふこと、場合に因つて、種々の意味になつて聞こえるのであるが、今しもつひ鼻の前立つて箸につるくと引かけてた壯俊は、何の事もない不意を啖つて、

「え、吃驚した唐突に何んの事つたな。」

はた／＼と團扇使をする、七輪の炎は、一巾辻の暗い隅に閃いた、火影で赤く見える親仁の顔は、片頬に笑を含んで、

「鍋焼鍋」と仰向いて叫んだか、草鞋の爪先で泥濘を刻みながら、

「へ、鍋焼鍋と来りやあ、時代なもんですぜ。ねえ壯俊さん、お

前さんが時刻を聞いて下さらない内が未だ見附けもんでさ、此奴は

古いけれど、恚うやつて蒲焼屋の窓の下へ立つた處は新しうがしや

う。え、もし。」

一口嚥込むで、

「何がよ、む。」

「いえ、これでもね、考へたもんでさ、私あ、種々な工夫をします

よ、過日中も其の何なんで、寒くはあるし、商賣は少いしね、狼の

情婦でも持つたやうに、毎晩山の手をぶらつくなわ恐れませ、唯歩

行いちやあ下さりませんからね、此處で思附いて、お前さん、媽、
にやあ内證で、可うがすかい、出刃を一挺新しい手拭でくる／＼と
巻きの、ボーン。」
鍋焼屋は看板の蔭で、大な手を二度ばかり掻繰つて、返す掌で胸の
處をぐツと壓へ、

「ト恚う、乳の下三寸といふ處へ呑んだ奴さ、」

といひけて莞爾とくしながら、天秤棒に頬杖して、頤の長い顔を出

して、客の壯俊を昵と見て、

「ねえ、考へたもんでしやう。」

「何だい、そりや。」

「何ね、お前さん、一寸それ敵持か、兎状持、御用だ！と来ると、

どっこいと退ッて、屋臺を小楯に取らうといふ。列卒が取巻てアリ

ヤ／＼、大向から鍋焼屋！と聲が懸る、へい、お幾ッ差上げますと

いふ段取でさ。は、は、は、は。

「何だ、くだらねえ。」

「いえ、申儀はよして全く遣りましたよ。」

「真個に遣つたのかい、人をつけ、其の荷物を擔いでか。」

「え、左様さ。」

「ふむ、引越が盜賊に入りやしめえしよ。」

「これは、」

「さ、かへりだ、も一ッ配んねえ。」

「お前さん、其氣で振舞へなご恐れますぜ。引越のは近來切符でございますよ、へ、へ。」

「何だ、皮胸のねへ、其の出刃ア何うしたんだ。」

「其がね、お前さん、初の内ア何か花道を背負ッて立つたやうで、

我ながら頼母しい氣がするもんですから、暗がりにも人でも立つて居

やうもんなら、故と頼冠をぐツと占めて、思入澤山、調子よくソレ鍋焼など、やりましたがね、變なもんです。野郎心得違をしてるもんだから、巡査にでつくわす度に、妙にまた氣がさしますからね、無事な内に差控へて、今度は恚うやつて、蒲焼屋の前に立つことにしたんです。こりや、もし、お前さんの前だけれど、長い匂を嗅いだ人が、堪らなくなると懐工合で……といひかけて、思出したやうな高調子、けろりとして、

「鍋焼鍋焼！」

第二

「かう、申儀ぢやあねえ。」と壯俊は腹を立てるでもない、三人は見知越の仲であらう。に流くした鍋焼屋の長い顔は、爾時天秤棒の上から引込むで、又看板の後に見えなくなつた。

「熱くして上げませうぜ。」
壯俊は雨の中に一筋爪白く、薄りと艶を帯びた、泥濘の道を、遙に千駄木の方に見透かしたが、躊躇で、腰をひねつて、宙を管廻はすやうに忙しく首を振つた。

「待ちねえよ、かはりめの鯀鯀にやあ些と注文があるんだから、待てよ。」と頻りに見透かして居る。

火花がぼつちりと、糸を曳いて、真赤にばちくと二ツ二ツ飛で消えた。七輪の下を煽ぎながら、

「何かね、召あがりなすものは。」

「うんや、其何だ、え、あ、己をば、何だ、其お前の傍へ、一寸、

かう、屋臺の後へ忍ばしてくれねえか、何うも来たらしい。よう、有難え、占、占。」と押立尻で、壯俊はあたふたする。

「さあ、お茶代には及びませぬが、何だね。」と背伸をして、ト

見ると、ぼつとした道の両側に、真四角な形で家々が黒いばかりなり。

「與一兵衛でも来ますかい、お前さん、それにしちやあ提灯が見えません。」

「人聞の悪いことを。かう、そんなんぢあねえ、づつと美しい、凄いなだ。」

「へい、洗髪の引束ね、横櫛で縹子の帯。」

「其間から、何だ、其の出刃庖丁ぢやあねえか。」

鯀鯀屋は首をすくめて、

「いや、大きに。志かし、年増かね。」

「其がよ、何もしつかり分らねえが、何でも大した代物にやあ違えねえ。私あ今此方へ来る道で、むかふの彼の寺の前から廣くなるね、

彼所ン處で會つたんだが、お前、この暗いのに、何だぜ、襟筋の白

いのだな、裾の方の何よ、松葉の模様まで、透通つて見えるやうで、ギョツとしたぜ。其にお前、其の髪に毛に櫛の齒の入つたのが、一筋一筋くつきりと、光るやうに見えたらうぢやあねえか。二人づれだから可かつたやうなもの、お前」と壯伎はいひく呼吸をはずませる。

盥鉢屋は落着いたもので、

「へい、お前さんお連様がありましたね。」

何、私ぢやあねえ、婦人によ、其別嬪によ。」

「で、何は、連は、其男なんで、

勿論よ。」

盥鉢屋は煽いでた手を留めて、

「や、勿論は御挨拶だ」と壯伎の顔を仰向いて見たが、フト俯向いて持直した其團扇で、額をはたどつて、

「やつてやがら、畜生め。」

「其畜生がよ、獸でなくつて可かつたい。ほんによ、狐狸狼の類でなくつて幸福よ。申戯ぢやあねえ、彼處いら場所柄が悪いからな、

お前なんぞ、そんなのんきなことをいふけども、出會して見ねえ、

全くだ。夫婦連の狐でもあるめえと思つて、私あ安心したけれど、

其でねえと、團子坂の方へ引返した處だつたい、其から、まあ、思

切つて擦違つたと思ひねえ、菊島中へ入つたやうな良い薫がして

な、其奴の入口と思ふ處から、ふうわりと、お前、生暖い風が出た

あ、人肌のぬくみだ、お前、堪つたわけのもんぢやあねえ」と胸震を

したが、振返つて、又透して、

「や来た、来た、堪らねえぜ、あ、一寸其處へ。」

「鍋焼盥鉢」と訝えた調子で一登呼んだ、屋臺のうしろで、こそこそして、

「お静に願ひますぜ。」

第三

「あれ又、降つて来たよ、寒いねえ。」

「まだ、宵の口だが、あしたはお天氣になれば可い。」と男は女から肩を離して、身を斜めに、傘の外へ顔を出して空を見た。餘り其舉動が活潑だつたから、婦人は驚いたやうに、足急に寄つて差懸けると、はづみで、水滴を踏む、蹴上げの泥、傘は揺れて卑ぼつたり。

「お、冷ッこい。」

「何うした。」

「泥濘だよ。」

「路が悪いからな、お前氣味が悪いだらう、待ちねえ。そいつお私がか持たう。さあ、」

蛇の目は一ツくると廻つて、さらくといふ雨の音。灰色の中空を傳つて男の手に渡ると、行違ひに白い布は千駄木の小路を横に切つた、婦人は手拭を取つて、足駄を脱ぎかけたが、絡み合つた男の肩に、左手をかけて縋らうとして、

「餘りかねえ。一寸、」

男はフンといつたばかり。

「よ、清さん。」

「ほんとに晴れないところや困つちまうな、宵に降つて、夜中に降つて、朝また降るんだから堪らない。」

「何をいつてるのさ。」

「お天氣のこつたあな。」

「雪駄を穿いて来たのぢやあごさいません。何もそんなにお天氣ばかり氣にしなくつたつて可うございます。」と婦人は故と拗たやうに

いつた。

「だって此方お稼人だからね。」

「は、」

「毎日怒う降られちゃあ遣切れないや、」

「は、は、」

「申戯ぢやあない、又此の稼ぎませんと申すことが、大躰難澁なわけのものぢやあございませんで、」

「は、」

「怒う申戯ぢやあない。」と向直つて顔を合はせると、婦人は笑ひ出した。

「はい、また稼人の女房が肩へつかまつちやあ悪いんですか。」

男は口籠つて、しばらくして、

「何を、何をいつてるんだ。」

「よう、其稼人の女房が一寸肩をかりちやあ悪いんですかよ。」

「何も然う大袈裟に談じるほどのことぢやあ無いだらうではないか、泥濘を勿返した位、俯向いて遣つちまひねえ、譯のないこつたあな。私が背後から差懸けて居て遣るよ、さうすりや濡れるほどの事あない。」とこれは殊の外眞面目である。

「何ね、何うせびしよりだけれど。」

「え、」

「でもさ。」

「くだらねえことを、さつさとしなにかい、雨の中だ。」

「はい、何うぞまあ、お天氣にいたしたいものでございますね。」

第四

「チヨッ口のへらない婦女だなあ。」とあきらめたやうな投げた音調、

婦人は脱兎の如く首筋に手をからみ、

「其氣で一才憊う。」

片足を舉げた、白い脛を後に反らして手拭でぐいと拭く。

途端に横町の角、目の前を遠くは隔てず、ぶら提灯が宙へ出で突然ズツと曲る。

と氣恥かしい、餘り明みへば見せられない風だから、婦人はあわて

ゝ手を放したが、用意をしなかつた足は落着かず、泥濘を踏んで地

に引かうとする装を庇つて、力を入れて、身軀を支へやうとするは

づみをくつて引くりかへした、片一方の足駄は鼻緒がブツリ。

「おや、」

危く支えたが、とう／＼泥の上へ跣足になつた、颯と襦を取つて装

を上げる。暗やみにちら／＼と、紅の縹神は燃立つやう、装をか

げた白い手も少し震へて、婦人は嘸と呼吸をついた。浮いて見える

やうな裾模様、幻に松葉がこぼれて、雨の中にぼがした色は、膝の
あたりで中絶がして、袖も、袂も、薄紫の三ツ紋着、胸高の帯でし
つくり也。これは又其の舉動、物越とは打つて變つて案外な立姿を、
提灯の明が衝と寄つて、透かして、じつと見て、

「おう、彘次ぢやあねえか。」

と太い、づんぐりした聲を懸けて、ぬつと立はだかつたのは、茶色
の中折朝子、些ど形のひしやげたの、丈足らずの外套、縮み上つて、

皺だらけで、恰も難破船の中から引揚げて来て、砂濱の日向で曝ら

したやうな引釣引張な奴、色をば鼠となむ見奉るのを一着した大男、

縋れ／＼の布子の袂を、細長く翻した翼の下から出して、澁色の大

な手でぶら提灯を婦人の胸のあたりへ突着けて、細面で色のくつき

りと白い、眉はやゝ太過ぎるほど鮮明な、鼻筋の通つた、生際の極

めて濃い、水髪を高島田に結つた鬢の軽い、其額の狭いのは短氣な

やうで邪慳なやうだが、目色の情の濃かな、そして、冷やかなやうな、氣嵩なやうな、思上つた、ものありげな、臉から頬へかけて薄曇のある、氣懸な、垢抜けのした女の顔を屹と見た。

見られて、いま異状のあつた驚の、まだ去りやらぬ瞳を据ゑて、婦人は又、朝の下の、大な、偏い、汚點のある親仁の面を瞻つた。

「あや、父上。」といつて眉を擡めたが、忽ち忘れたやうに其や、乾いた、逆氣であれて居る唇に微笑を浮へて、

「可厭だ、父上たら、唐突に吃驚させたまよ。まあ、御覽なさいな。」と我ながら呆れるやうに、だらしのない、危く泥に引摺りさうな、しだり尾の山鳥の尾の色彩ある亂れた裾を俯向いて見た。雪の様な足は引込まれた如く地について、爪草は外れ、横になつて、新しい足駄の齒は俯向いてる。

「こんなになつちまつたぢやありませんか。」と裾を取つた手を上へ引いて、長縷袴をはらくと拗ねたやうにニツ三ツ揺り動かした。

「しやうがないことね。」

黙つて見詰めてた親仁は、提灯を手元へ引いて、

「左様よ。」とどきつくいつて空嚙を吹く形をした。

「親の罰だ、其位なことはあらうよ。乗次、手前酷くめけてるな、工面が可いに見えるぜえ。へへ、と小氣味の悪い笑ひやう、肩掛にくるまつて黙つて立てる男の方を一寸見向いて、又へ、へ、へ。

「旦那、お楽しみでござりやす。」

「おとつさん何方へ。」と男は悪怖れず、一場の粗其様子の察しらるゝ光景を、故と知らぬ顔。

「何方へも此方へも遣切が付きやせん。此身軀あ持つて行く處がねえんでがすが、打遣りや、井戸の底か、百本枕、へい、此頃あ寒うがすからな、ぶく／＼は些下さりません。梁から下らうとすりや、

私わたくしの家いえの屋や簷えん骨ぼねなんぞ、杉すぎ箆へらに蠅はだから、此こゝ二十貫にじゅうくわん目の重おも量りかは持も切きれねえんで、人ひと間まの願ねがよりか鼠ねずみの巢すが真ま先さきに下くだりまさ。首くびを縊しめるののに貸かしてくくれるやうな慈あは悲れ深こい差さ配はいさんさんも居ゐなさらねえしよ、な

あ、

条じょう次じは黙もくつて目めを反そらして、傍かたはらなる寺てらの垣かきの真ま黒くろい梢こぎを仰おほいで居ゐる。

「ねえ、旦那だんな、仕し方かたがねえから、ままあ、毎まい度ど恐おそれ入いりまさすが、お前まへさんの處ところへ行いかうと思おもつて出でて來きたんで、こりや、好こい處ところでお目めに懸かりました。何なにも時とき代だいなこたあいやしませせんから、何なに卒そつ一いつ番ばん、え、

お前まへ一寸いっしゆん願ねがつてくんねえ。」

「又また何なにかいつてるよ。」と条じょう次じは口くちの内うちで咳せきくやうにいつて、聞きかない振ふで澄すして平へい氣き。

「御ご覽らんじやし、彼かれでござりやす。段だん々げんげん彼かれの通とほりでござりやす、呆あはれたものでござりやす、は、は、は、大だいしたもんでござりやす。」とな

らへたゝて忙いそしくまくしかける。

「何をいつるのさ。」

「何をぢやあねえ、何なにだ澄すしやあがつて、此こゝ間まから三さん度どばかりスコ

タンをくはしたぜ、申まう戯ごぢやあねえ、おう、何なにうかしねえよ、不い可け

ねえせ、おい。」と打うつて變かつた高たか聲こゑになつたので、条じょう次じは堪たり乗かね

て向むか直ちやうつた。

「往むか來き端たんで何なにのこつたね、見みつともない、聞きえますよ。」

第五

「此こゝ方かたあ見みえましたよ、お陸りくいこつた、繼つ子こ同どう士しが逢あいひをしやあし
まいし、朝あから晩ばんまで附つ着くいて居ゐる癖くせに、何なにだ。澤た山さん左さ様さましねえ、
親おやを打う遣ちらかしどいて、やい、水みづ入いらずの小こ鍋なべ立たで巫ま山さん戯ご足あらねえ
で、千ち駄だ木ぎぐんだりまで此こゝ雨あめの中なか、道みち行ゆを極こめてやあがる。何なにの真ま

似でえ、人おもしろくもねえ、此方あな、二十三や四そこいらで、手前を手放して、野郎と好な真似をさして置くんぢやねえけれど、商賣をしてる内も種々心着をしてくれた、働きもんだ、たツた一人の女の活きた身体を、骨までしゃぶるでもあるめえと思つて、尾鱈のある内泳がして遣りや、己の慈悲も知らねえで、阿魔！好氣になつてらい。餘計な小遣處か、此頃お月々の極も入れやがらない、全くな、随分酷工面をすることも知つてるし、着てるものを脱いで寄越す位好氣前の奴等だから、俺もぐつと買つて見脱して置くんだ。そんな状をして、ひらく／＼金魚のやうに泳ぎ出すやうぢやあ工面が可いんだらう、出しねえよ。又あすの明後日のおツちやあ果がつかねえ、俺もづつとひつてんだ。懐中をひつばたけ。身体を引摺つて歸らうたあ言やあしねえ、然うやつて二人で居りや素裸で居たつて寒さは凌げらさ。

ほんとうだ、夫婦で乗りや船にも酔はねえ位なもんだ。出しねえよ。「だからさ、」
 「何だ煮切らねえ、(だからさ)なんか大嫌だ。同一口で出すからとばかりしいひねえよ、しッ切のねえ奴だなあ。まあ、」
 「だからさ、アレ、いゝえさ、分つてるから、知つてますよ。」
 「ぢやあ、寄越しねえ、直ぐに寄越しねえ。ほんとうだ、往來端で見ッともねえ、場所柄もわきまへず、乗次のチャンともいはれるものが、何のこツた、はゝゝはゝゝ。」
 親仁阿ゝとぞ笑ひける。屹となつて何か言はうとした娘は案外なので、少し消けて、
 「だつて此處にやあ無いのだから、」と極の悪さうに低聲で言ひ淀む。
 親仁は耳を差出すやうにして、
 「何、無え、ぢやあ、此方の旦那様の懐中にあるのか。」といつて振

向いて男の顔をぢろりと見た。

「父さん、堪忍してくんねえ、今、全く困るんだから。」と男は親しげにいつて困じ果てた形である。

「はてな、旦那様が全く困つて、奥様が此處にやあないのだ。待てよ、旦那様が全く困るから、で、奥様が此處にやあないのだから。」

え、と旦那様が今全く困つて、奥様が此處にやあねえ、はてな。」と中折を頂いた大な顔を、二人の前で二ツばかり傾けた。

是には眉を擧め合つて、二人ともしほれたのである。

「待てよ、旦那様が、全く困つて……」と又ねつゝりといひかけるので、乗次は堪らなくなつて、崩折れるやうに身悶した、切なる聲で、

「厭よ、父上、もう堪忍して下さいよう。」
「うんや、待ちねえ、旦那様が……」

「あれさ。」

「いや、こりやあ不可ねえ。」

「だからさといふだあね。」と思はず胸を抱いた。

親仁は見も返らず、かまひもつけず、俄に狼狽へたやうな、吃驚したやうな高い調子で、

「不可えせ、不可えせ、こりやあ不可え。」といひながら、あらためて二人をぢろり。

「おい、何うしてくれるんだ、今困る、此處にや無えとツて、これが、何も、銀行へ預けてあつたり、箆笥の抽斗に藏つてあつたり、瓶に埋けてあつたりする人達ぢやあねえ。此處になくツて、今困りや、矢張り、カラツケツた、ひつてんだ、天保も何にもねえんだ、矢張ねえんだ、何うしてもねえんだな、やい。」
「手がつけられないよ、と餘りのことに乗次はムツとしたやうにい

つた。口の裡であつたけれども忽ち開谷めて、

「何だ、手も着けられねえ、手がつけられなくてつも可いから後生だ、一本つけてくれ、熱燗にしてくれ、むんやよ、扶持をつけてくんねえよ、父親の臍は干上るぜ、申藏ぢやねえ。」

「可いから、分つてるよ、あした何うにかするからね、まあ、今夜は堪忍しておくれ。些と用があつて急ぐんだから、」

「は、あ、お急ぎかね、御道理だが此方も急ぐよ。ねえ、旦那、お出先で誠に相済みませんが、ほんとに何うかしてあくんなさい。些とで宜うがす、何五六枚もありや二三日凌げます。」

「其がね、何だ。」

「今、全くお困りかね。」

「何だね、父上。」

「え、黙つてろ、かうなりや野郎が對手だ、さあ、何うにかしろ、

よう、何にかしろ、とむりくと寄つて、え、何うしてくれるんでえ、べらぼうめ。」

「条次、どいつて男は屹となつて、決した色が見えて自若とした。」

「お前お父さんと連立つておいで、父さん、お前だつて知つて居やう、私も今まで随分出来るだけの事はしたつもりだ。さうくは遣切れない。可いや、働きがないのだと思つて引退らう、可いから連れて歸んねえ。」と落着いて鷹揚にいつた。親仁が何かいはうとするのを、条次は遮つて、色をかへ、

「何をいふんですよ、お前さん。申藏ぢやあゝりません。」

親仁に向つて、父上、お前まあ餘りだ、勤てる内にも朋輩が、あんなに親に紋られちやあ、那の女もしまひにやあ枕探だと、いはれました。それだけでも分りまじやう、些たあ察したつて可いぢやあないかね。」

「察しるも、察しねえも、そんなことお何も金子とかいはいりのねえ
こつた、金子さへくれりや察するさ。御推量申しまさあね、ソイツ
が出来なけりや察しも、へつたくれもあるもんかい。」

「だからさ何うにかするッていふのに、分らない人だねえ。」

「何が分らねえ、やい、何が分らねえよ、困りますから頼み申し
ます、稼いでくれる娘は差上げました、其代扶持をおくんない、
出来なけりや又娘に稼いで貰ひます、此位分つた乃公は山の手に少
えせ。何うだ、え、あ、あ、それでも分らねえといふのかよ。よ、
中折の下の頤を突出して、聞くに得堪へなくッて鑿んで俯向いて居
る娘の鼻の先へぐいぐいと突出して、押つけるやうにして、また突
出した。」

「よ、何うだ、よ。」

「エ、モ、うるさいね、と悔しさうにいつて弱り抜た果の心激して、

焦れたやうに振りつけて顔を背けた、はらりと一筋切ッて落したや
うに其の曇を帯びた薄暗い、目のあたりにかゝつて居た髪びんの乱れの
揺れて下つたのを、喰切りさうにキツと齒をしめる。

第六

「何だ、うるさいだ、汝うるさいたア何だ、此此口でいつたな、と
頬のあたりへ親仁は鈍豆のやうな黒い拇指をかけやうとする。」

「これ、」

「可いんですよ。」と乗次は割つて入らうとする男をおさへて、立直
つてキツと向ひ合つた、瞳を据ゑて、

「何うともあしよ、父上。」と清しくいつて胸を張つた。

これに一足退つたが、覗くやうにして、睨みつけて、

「何、何うともしろだ。」

「はい、可いやうになさいまし、はい可いやうになさいまし、です
がね、連れて行かうたッて私行きやアしないよ、無理に連れて行き
や死ぢまうから、」

「何だと？」

「手足を縛つときやア舌アくひ切つちまうよ、可ござんすか。」

「馬鹿アいへ。」と呆れたやうにいつて手を控へたが、これは仕兼ね
ない女であるから、親仁は少したぢろいたのである。

「さア、其つもりでね、」といひながら泥濘をつぶり、足踏をしてつ
か／＼と小刻に詰て寄る。親仁は、「はい、」といつて又退つて力の抜
けたやうな聲で、

「乗、然う強情を張らねえで、其の着物を脱ぎねえな。」

「え。」

「憚うなりや打出さい、話は碎けるが可い。え、おい、だから然う

いつてゐるぢやアねえか、二人で居りや素裸だつて切なかア無から
うてんだ。」

「これかい、」と思はず頤を深く襟に挟んで見た。

「然うよ、一寸踊める服装だぜえ、何も生木を裂いて連れて行かう
たアいやアしねえ。何うともしろとまで切出した位なら、皮を剥く
なんぞ仔細はあるめえ、一番酔はらつたと思つて遣つけねえ。そん
なことに驚くやうな氣前ぢやアらつしやるめえ、何うだね、おい
らん」といつて快げに又笑つた。

「これは不可いよ。」

「なんなら一枚で可いや、當分間に合はせだ、そいつを手形に此關
所はづつと開き。まだ宵の口だ負けてやら、」と話は整つたやうに
一人でのみ込むで促がし立てる。

「憚ほどの詰めになつたものを、此場合に其も厭とは、自分の心持

でもいひかねたが、脱くべきものではなかつたらう、糸次は、黙つて俯向いた。

「よ、よこしねえ、何を愚圖とくしてゐるんだ、着物が何うの憊うのッて、そんなことア、暖簾を島田で分けて出て、生白い丁稚の背筋を膝でつゝかうといふ、あめえ女が氣を揉むこつた。お前なぞア、そんなとア宿醉の朝忘れッちまつたらうに。親仁が若い時なぞア、奴を引背負の、素裸で、大井川を越したものだ。ほんとうに、今時の若い奴ア氣前が悪いぜえ。色だの、戀だのッてえやつが、着ものなんぞ何だ、くだらねえ。いつかは何うせ脱ぐものだ。さア、やつつけねえ、唐人鬻ぢやアあるめえし、へむ、いやに綺麗なるものを嬉しがらア。」

「でも、こりや父上損料なの」と詮方なげに微笑んでいふ。目を睨つて、何、損料だい、フウ、其方ア損料だつて此方ア徳用だ、

さア、寄越しねえ、チヨツ帯一本と相場を下げた。此方ア手を拍つぜ、そら、ほんど拍く。

「でも、こりや……」といひかけてもう舌が濡つたやう、糸次は泣くことも出来ない顔色で、え、え、といつたが身を震はし、

「堪忍しておくれよ。後生だから、つかくと寄つて、小腕を捕へた。」

「あれ、」
荒鷲の翼騒ぎけたる、外套の袖は左右に扇れり。

第七

「餘りだらしがねえ、一枚寄越した、可いよ。泣くな、泣くな、可い見だい、さ、さ、これを憊うやつて」と逆らはれなくッて居窘む糸次の帯際を取つておさへ、

「孝行者だよ、可い兒だよ、死な母親も然ういつたツけの、糸次は氣立がよくツて美しくツて、優くツて、あれで錢のねえ男に情さへ立てなけりや言分のねえ女だつてな、全くだよ。なア、誰がよ、誰がよ。」

「厭よ！ 父上。」と身悶して、婦は呼吸の下で聲を立てる。ト片肌はらりと脱いで下つて、玉のやうな胸に長襦袢の紅が、絡みながら颯と見えた。

「あれ。」

「様ア見ろ、ブツしり懐中して居やがる癖に。」

と手拭に包むだものをぐツと掴み出して仰向いて透かしたが、

「おや、」といつてはツたり取落とすと、土の上へ、之は！ 磨澄した出刃庖丁。

「父上様。」

婦人は然まで驚いた状も無く事件の小口から溢れて落ちた出刃庖丁と、釘着にされた如く呆れて立つた、刺製にされたやうな父親とを見較べて、却つて落着いて呼び懸けた。

「一寸。」

「あゝ、」と素直に返事して、親仁は穩かならぬ顔色、きよとく。

「一寸。」

「何だ、何だ、」とブツと寄つて、目を睨つたまま顔を差寄せると耳に口、

「一寸ね。」

爪立つやうにした糸次と、居寝むやうになつた親仁と組違つて、錦のやうな裾襖様と、其の裏のやうな色の襦袢を外套は、しつくりと合つて少時動かないで居た、中頃談話の筋か通り兼ねたかして、附着いてさうな其中折をすぼりと脱いだが、ト見ると油染みた大坊主。

「呼き果てし、乗次は莞爾、

「といふんですよ、ね。」

はつたり立離れて親仁は生れかほつたやうになつて、頷いて、

「む、む、此奴ア可いわい。いや、乗次さん頼母しくなつて來たぜ

もあるもんか。こんな旨え話があるぞ知つたら酒でも飲んで寝てる

んだつて、可いわい、素敵に可いわい。何も遠慮することアねえ、

私ア幾らも車賃位は資本の方へ下ろしたものを。いよう、二千兩、

お歩行は勿躰ねえぜ。」とほく／＼悦に入つたは何うした事か。

「否、此先まで乗つて來ただけども、合函は泥濘で曳けないッ

て下したんだよ。」

「は、は、泥濘で曳けなかつたか、堪らねえで遁たんだか、何だ

か分つたもんどやアねえや。お前は其で可いが旦那ア覺束ないぜ、

「旨くやれやうか、怪いもんだ。私ならぐツと尻端折で大舞臺を踏む

んだがな。」

「い、えね、何うぜ一盃引かけて行くつもりなんだよ。其處ですつ

かり支度をしやうと思つてね、那の蒲焼屋へ寄つてくのさ。」

「可いや、可いや、他家なら怪いが然云ふ家なら後見も要るめえ。

しつかりやつて、うむと儲けねえ、奇代に可いわい。俺ア又之がら

些と苛めに行く奴がある、ぐるりと廻つてお前ん處へしけ込みの、

や吉左右は、といふ寸法にして待てるぜ。」

「あ、其が可いわねえ。」

「父さん濟まないね。」とやう／＼口を出した男は肩掛から目ばかり

なり。

「いえ、飛だお邪魔をしました、あ、お前、其の足駄ア己が引摺

んで行つて勝手口へ投込んで直ぐ井戸流しで足を洗うことにすら。

で憊う既足になり、ぐい、ト此足駄はこれでも山桐だから些たア
軽いぜ、足の皮を擦切るやうな緒ぢやアねえ、穿いて行くが可いや。
そうして、そうら此外套は旦那に被せの、お前は矢張其肩掛を引掛
けねえ損料だ、は、は、は、濡れると痛事ツたい。處で提灯はトヤ
つて袂へ入れるわ、ぢやア氣をつけて行きねえよ。
親仁は荒寺の和尚のやうな、古布子の既足となつた、足を突張つて
威勢よく空を見たが、
「や、奇てれつ、妙不思議だ、ちやうど雨も上つたい、素敵よく。」
此方は素敵だけれども向ふの二人、鋤鉋屋と壯俊の待遠さといつた
らあるまい。

第八

「驚くよ、何うもそんなものを、刃物なんぞ持つて居やうとは、棒

組も知らなかつたぜ、可いのかい。あ、
「大丈夫ですよ、親類の家へ仕懸るのだもの。」
「そりや、まア、さうだけれども。」と男は襟を立てた外套に頬を包
むで歩行く。婦人は肩掛を引廻はして、
「お前さんこそ怪しいよ、ほんとにしつかりなさい、ちゃんとして
や。」
「何、そりや心得てら、」
「でも、お澄さんに氣があるんだから、と一寸立佇る。」
「又、つまらない、何のことツた。」
「い、え、むかふ様でも一通ぢやアないのだよ。お前さんだツて左
様だわ。」
「くだらない、さつさと行かう。」
「でもね、今日お灰葬だつたさうだから、那の娘は屹度お參詣をし

たよ、そして實家へ寄つたらうから、こりや今頃は宅に居るかも知れないよ。」

「居たつて掃ふことアない。」

「何だか、不安心だねえ。」

「何をいつてるんだ。」

「一歩後れたのが追ついで、縫る様にして立並んで、

「でも、一昨日も寮でさ、あの娘がソツと紙入を出して、お前さんの傍へ置いたつて、お安くないのね。思つてると、いくら堅氣でも

「ちやんと氣が着んだよ、感心なものだわ。でも一寸氣障さ。」

「だから刎飛ばして遣つたアな。」

「其がさ、厭だといふんでさアね。」と莞爾して振返る。

「何故、」

「だつてもね、何の氣もないものなら、そんな場合だし、他人ぢや

アなし、取つて遣つたつて可いちやアないか。知らない振をして、

「あてつけて置いて(那)畜生、工面が可いかと思つて、いやに面當を

「した、生意氣だ、癪にさはつたなんて私にさうも謂ひだつたらう。」

「いつたが何うした、仔細はあるまい。」

「なんて云ふけれどもね、其は矢張色氣だわ、何か思つてるからつ

「ひそんなすね氣が出るのさ、すねたり、くねつたりするのは皆色氣

「なんだもの、ねえ、清さん。」

「ふふ」と仕方のないやうに男は笑つて、「一言もねえ、あやまつた。」

「御覽よ、氣障だねえ。」

「堪忍しねえ未だ若いんだよ。」

「憎らしいねえ。」

「あ、い、人が見らア、」と二人ちやんとして黙つて鯉鮓屋の前を通つ

外套と肩掛と並んでいづれも俯向いて行つたのを、下から差覗いて
伸上つて、壯俊はすつと立つて、

「お知合かね、」と盃餽屋は落着切つて居る。ト、慌てたやうに足踏
をして、

「ありや、遊女だ、おい、北廊で一番だといった、源のお職で丁山
といつた、日本一だ、おい、さア、曲つた、え、おい。」と號令をか
ける騒ぎやう。

うどん屋も吃驚して、
「音に聞いた、そいつア、と飛上ると天窓の上で人の氣勢、身をひ
ねつて二人が仰で見た。蒲焼屋の二階の障子に小さく人の影が映つ
たが、ぼつと大きくなつてするくと歩行いた。

第九

「そんなこと仰有るもんぢやアございません。母様。」と長火鉢の此
方に三枚襷の紋着、細珍の帯、姿の好い、品の好い丸鬘。龍甲の弁が
結立の房とした黒髪に映つて、透通るやうで美しい。年紀の比、九か
二十、造は高等だけれども、未だ若いので、初々しい。

「何のお前、何と言はれたつて好と業だ。いゝえさ、」と聲に力を入
れて、何かいはうとする、其美女を遮るために、火鉢の縁をぐいと
壓へた。この母親老けた造、好の扮装として置かう、但顔立に注文
がある。一鉢良艶好く肥た方で、額が廣く、髪が未だ黒い、髪附で
固めた大な丸鬘、前髪を取らず、ゆつたりと頬に肉あり、鼻筋は通
らぬが低くはならず、口元が愛くるしい、これだけは向ふに坐つた
娘であらうか、母様といつた、其の美しいのによく背て居る、皺も目

立たず水々しい白い粉土で塗潰したやうな真向の大な顔の、生れは京阪地でもあるらしい。

其の口元も、耳も、眉の痕も、染めた齒も、太つた大きくした身軀と逆比例に、すべて可笑なほど不釣合に小さいが、廣く生へ上つた出類の額。この額越に人を見る時頗る險がある、これは人のいふことに同意を表さない、すなはち不得心を表はす印で、萬事いゝえさ、といつたやうな場合にあらはれる此の人の癖で、今のいゝえさにも正に其顔色をした。

憚ういふ相の人は萬端取計が上手で、世事に長け、人交際が好く、抜目がなくつて、義理堅いやうななわけのもので、酒は飲まず、煙草は飲むが、極めて堅氣で、食好のない性で、少し見得を張る傾かあつて、其だけ又交際が行届く、重寶な、結構な、操正いものだとしてある。

但しまかり間違つてこんなのが下手にまごつくと新造になつて、ねつゝ遊女を苛めるものだ。

けれども中々以て、何として、これは身分が違ふ宗偏流茶の湯の名家、毎日のやうに侯爵、伯爵、子爵、長くも又公爵のお館などへ出入をする久世友房の内儀で、陸軍大佐篠山六平太の夫人澄子が實家の母上様。長火鉢の向ふに坐つた美しいのは、其風采でも知れやう、篠山大佐夫人、舊のお澄である。

「ねえ、お澄、お前は何ういふものだから、變にまた、清が最負だけれど、それりやまア、從兄妹同士で親類だから無理はないがね、あのな甥は眞個のことだ、困りものさ、何うしてあれだけな立派な官員様の見にあゝいふ役去ものが出来たんだらう、第一お前、畫を描くなんて心掛が悪いわね、其も精出して勉強して上手にでもなりやまだしもだけれど、から、なまけてばかり居るッていふぢやアない

か。あの位評判な共進會にさ、あれでも甥だとも思ひなさりやこそ、
父上も氣に懸けてお前、上野くんだりまで、お前、柵を結つてある
つていふから遠くちツヤア見悪いからツて、故々新しい眼鏡を買つ
てお出懸けなすつたぢやアないか、何うだい、お前、清とも何とも
人形の顔一ツ出してありやしなかつたつて、左様でしやうさ、何が
又書けるものか。

「それでも、あの、母様。」

「いゝえさ、」とおかつかぶせるやうにいつた、ソレ額を御覽むろ。

上目でも澄の顔を一寸見て、

「厭に最負だよ、此人は。お前、篠山様の奥様が、第一御身分にか
はりますよ、お前に限らずあんな貧乏な下手畫師が、甥だの、従
兄妹だのツて、眞個だよ。」

「それですけど、あの、お亡なり遊ばした叔母さんは、お澄、お

澄ツて、甚麼に可愛がつて下さいましたでせう。」

とお澄は然も懐しさうにいつて寂い顔をした、こゝに叔母さんとい
ふのは、下谷に踊の師匠をして居た、久世が妹で、後に或る高等官
の妾になつた清の母親である。

世に亡き叔母さんの徳を上げた、お澄の其の顔色は思ひ入つたもの
であつたので、母様はぐツと瘵に障つた様子、

「はい、私はもう一向に行届きませんでございましたよ。」と少し仰
向くと、胸を張ツて、むつくりした、枕のやうな膝の角で、兩手を
組合はせた四本の指で妙な圓いやうな形を拵へてツンとする。

これは一言でもつて人が服すれば可、さも無くツて其のいゝえさが
蒸返された時の印で、斷つて置くが、亦得意を示す時にも且つ用ふ
る。あの額越の上目と同じく癖の中に數へて宜しい。

第十

お澄は母が此様子に馴れて居る女であるから、ソレと見るとそらさ
ないで、

「まア、母様は、どいつて莞爾した、其のあでやかな顔色を見ると、
さすがに早まつたのに気が着いたか、苦笑して極の悪さう。」

「いゝえさ、叔母さんのことは何だけれども、其なら其で猶のこッ
た、あの母様にあんな見が出来たと思や、亡なつた人にも氣の毒ぢ
やアないか。些ど皆でたしなめて魂を入れかへさして遣なけりや、
伯父叔母の役が済ません、第一清が身のためにならないやね。」

「それでも、何ですよ、母様、あの共進會で評判だつた、踊の知盛
の書は、まだ未熟だからと仰有つて、落駄は遊ばさなかつたんださ
うですけれども、清さんがお描き遊ばしたんでございますとさ。」

「いゝえ、何のお前、評判の、そんな物が那のおなまけさんに描る
ものかね、遊女を引摺込むやうな心懸ぢや、
まむしよ入道が相應ですよ。」
「それでも業平橋の伯父さんが御覽なすつて、違ひない、旨いもの
だつて、そしてそれはもう、お身持は何だけれども、腕は確だから
頼母しいつて、いつでも左様いつて居らつしやいましたよ。」といひ
かけてお澄は沈むだやうであつた。

「左様さ、清を譽めるやうな、そんな變物でも在なさるから、那の
伯父さんも片意地で、寮守をして、まア、本郷の旦那の飼殺といつ
たやうなものさ。歌だわ、俳諧だわツて風流の内は可いけれど、お
前、死水を取る者もなくツて一昨日お亡りぢやアないか、何だつて
いふぢやア無いか、お前が何か伯父さんの好きな肴を持つてお見舞
に行つたら、もう亡なつてお在でだつたさうぢやアないか。」

「はい、伺ひたい」と思ひましても遠うございますし、それに種と取紛ましちやア御無沙汰ばかり、一昨日は、母様、ちやうど一年ぶりでございますました。」

「む、其位にやなるだらうよ。」

「木戸を開けて入つたんですよ、それから、お勝手口から上らうとしましたら、しまつてしまきませんでしたから、直ぐあのお襟側へ廻つて見ますとね、絨毯の上へ床を取つてお寝つて在つしやいまして、直ぐとあの、お傍へ参つて、牛込から参りました、澄でございます、おぢいさん、御無沙汰をいたしましたして済みません、おぢいさんおぢいさんッてお呼び申ししても、何にもおつしやらないで目をつむつて在らつしやるから、私はまた、餘りな奴だと思つて、御機嫌が悪くツて、其で、其で、あの、お返事を遊ばさないかと思ひましたらばね、」といひかけた言は切れて、お澄は唇を震はしたが

＊ロリとした。

母親は例の額を見せの、上目を遣つたが、こゝでは「いささ」といふべき數ではなす。

「まア、可いやね、可いやね、其で何なのかい。」

「はア、母様すやくどね、何う見ても晝寝をして在つしやるどより思はれませんの、お鼻が隆くツて、あの長い白い眉毛が横顔の外へ房りと出て、些ども變つては在つしやいません。其で何ですよ、あ、お澄かとも何とも言つて下さいません。そりや、御無沙汰いたしましたのは悪うございますが、私の心はそんなのぢやア無いのでございませす。又お心持に障つては悪いと存じましたから、篠山へ嫁いでから初めて上りましたのに、故と、あの、前垂がけで参りました位ですもの。」といつてお澄は又浮かない様子。

母親は小さな目をぱち／＼、

「何だね。まア、
其でも、あの、おちい様はそんなことがお氣に入りません方です
から、」

「意固地者だよ、と棄てるやうな調子でいふ。お澄はしみく、
「い、え、母様、始終左様いつてお聞せなさいました、譬ひ立派な
處へ縁着いても、少しでもそんな顔色をすることはなりませんッて、
「死だ人のことばかり、まア、何でも可いやね、と母親はうるさく、
うに後の口をきかさないといつたやうな。
行詰つたやうにフト黙つた、お澄は俯向いて、

「はい。」
「其で何かい、漸ど氣が着いたのかね。」
「え、何時までも私は何かお氣に障つても返事を遊ばして下さら
ないのだと思ひまして、情なうございましたの。おちい様、堪忍し

て下さいまし、私が篠山へ参りましたのは、何も清様。」
「え、ものは想つても知れやう母親は例の大額、額越の上目で
險也矣。」

第十一

娘はハツとした様子でソと母親の顔を見た、眼の縁に颯と色を染め
たが、白い手で胸をおさへて、詞を濁して、

「あの、清様が其處へお在なすッて、而ても口元へ手を當て、眞若
におなんなすつたのでございます。」
「左様だつてね、左様だらう、お小遣の出處が無くなつたと思つた
らうさ。む、屹度左様だよ。」と屹度以下は獨言で、然も得意らし
い笑を洩らしたが、急に又、
「そして、甚麼服装をして居たい。」

「ちゃんとして」と極めて簡単に答へて、お澄は聞き度も無さうに目を反して傍を向くを、小さな目で追廻はして、

「何、嘘だよ、しみツたれて居るんだらう。あゝは成り度ないものさ、」と今度の獨言は(あゝ)から下、これは断念たやうなものいひであつた。娘は友染の袖口をちらりと、火鉢の縁に、片手をついて、根の締つた丸鬚の黄金の根懸がきらりとして差俯向く、襟脚が雪のやう。耳朶に稍色を染めたばかりで、黙つて居る。

「だつてお前、心柄だもの、賣女なんぞ女房にして居りやア、當前さ。第一又人交際の出来るわけのものぢやアないよ。向ふから來たつて此方で御免さ、何處でも寄着けはしないだらう。中橋のなんぞ、盥を撒きかねない見豚だもの、いつて見りや不便なものさね。でも、あの、業平橋へは一寸一寸出向いたと見えるねえ。」
お澄が黙つて居るので、些と拍子抜の形で呼び懸ける。

「ねえ、お澄。」

「はア」といつたが、何の返事を誰が何うしたのかこれは分らず、餘り茫乎だつたから繰返して、モ一度、「はア。」

「衣裳も無かつたらうし、第一お前外聞が悪いやね。そんな時は遠慮をする方が増だらうのに、あの何だといふぢやアないか、些と盥所の御用でもといつて彼の賣女をお前新佛の家へ引摺込むだツさ。大方お前が歸つたあとだらうよ、父上が悔にお行なすつた一足あとへ來たのがソレさ。あの女が又身分も思はないで一向な酒亞突だとね小憎らしい。其内中橋のも、利根川べりの叔母さんも、お前集鴨の姪も本郷の旦那も皆集まんなすつたらう。一盃はじまると。(色男何うだ) なんて、清が手ン手に小突かれたアね。其内父上も一盃めしあがつたので、こんな時と思ひなすつて、お前、(清、清)ツて呼ぶと居たゝまらなかつたんだらう、死骸の傍にやア見えなかつたよ

「遁げるッて奴があるか何處だ何處だ」ッてんでね、立つて勝手へ
 お出でなさるとお前、お店から来て居る、中番頭ね、植木屋だの、
 仕事師だの、お三どんなんか、立つたり、居たり、目まぐるしく
 立働く中に、お前、釣洋燈の下を除けて、火の消えかゝつた長火鉢
 の前に二人小さくなつて、きよろ／＼して居たつさ。女ア小意氣だ
 さうだけれど、
 どいひかけて母親は、お澄の水際の立つた、縮緬のどり／＼した三
 枚襷のなり形を、おろ／＼と見て、したり顔で、密に頷き、
 「何ね、縮柄も分らないやうな木綿物にお前、今時、浴衣を襲ねて、
 黒緋子の襟をかけてさ、雪のやうな胸を少し見せか何かで見じめだ
 ね、其の上へ双子の半纏だつさ。清は彼だ、あの飛白の羽織ね、矢
 張薄着だつて、左様だらう。お前の晝間見た時も同一だつたらう、

え、お澄。

はア

「ねえ、……だつたらう」と半ば目で言つて念を入れる。
 「何うでしたか、私は能くは存じません。」とお澄は何か之を聞くに
 堪へない様子、悄れ切つて痛／＼しい。母親の意氣はます／＼壯だ。
 「氣が着かないッてことがあるもんか、ねえ屹度左様だよ。」
 お澄は少し屹となつて顔を上げた、が俯向いて居た所爲であらう、
 鬚の毛が二筋ばかり玉のやうな頬に懸つて居たが、程の好丸顔は、
 片頬を殺いで落したかど見えた、時の間の寒れやう。
 「あのお口に手をあて、え、と仰有つた清さん。あれおぢいさ
 んはお亡りなすつたの、と私はものものはれません位でした。其で
 すものをお召物處でございますか」とじつと母親を見た目は怨しげ
 である。

此處母親は少テレの形、しばし言もなかりけりで、左の膝頭へ手を組んで四本指で楕圓形を形造つて仰向き、二の糸でツン。

第十二

俄に「いゝえさ」と例の額に陣を代へて、唯一騎取つて返した勢、「そりや、左様だけれども、お聞きよ、まアお前。違ひは無いのさ、屹度左様さ。人の中に出るにも着換ちやア來られ無いんだよ、恥かしいッちやアないやね。それで、男ッ振と編袴の袖ばかり、いやに奇麗だッさ、心がけが悪いんだよ。然うやつて二人縮こまつて居る形を見ると、お前、氣の毒なやら、哀なやら、馬鹿い、しいやら小癩なやら、父上も心の中ぢやア不便ども見なすつたらう。狸め、黙つて挨拶をしたから、父上さんが、空惚けて、(清、こりや女房か)とおつしやつたね。まさかに、其場合ぢやア、誰がお前、私の女房だ

と言はれるものか。其にね、まだ其の前に佛様を棺に納めやうとするどね、知つてお在の通、七十幾つといふのに、あの格服だらう。大一番に五人懸りで、うむ、すん、揉込むやうにしても納まらないのさ(佛様が承知しねえわけだ、親類中に不心得な奴があるからな)といふものもありや、(おんな者が家の内に居るから汚れるのだ)といふしね、(剛情だなア、可加減に思ひ断つて生れ交るが可いや)なんと佛様にあてつけて、お前、經帷子を着た人を手取足取しながら、むんむと線香の燻る中で遣つゝけたつさ。亡なつたおぢさんは大さう可愛がつてお在だつたし、さうして堪らなくなつて那の清が改心すりや佛様に何よりの供養さ、親類中が悪く思つてしたことぢやない。そんな、こんなだつたもんだから、父上が女房かッてお聞の時、清が厭な顔をして、(否、妹です)といつたさうだよ。妹が可かつたねえ。(左様か、年紀は、二十四、少し年増だが、内の操の嫁に欲いな、何

うだ。叔父が頼だ、すつかり氣に入つた、可いや、媽、が文句をい
つたり、操が冠を掉りや、俺の嫁にする、構ふことアない、誰が何
どいつたッて俺やうむと氣に入つた、惚れたよ、意氣だ、綺麗だ、
容子が可い、馬鹿に好いッて父上が、もじくしてゐる奴を流盼に懸
けて、散々冷かしたッてね。面白かつたけれども餘り玩んだもんだ
から少しムキになつたと見えて、善は急げですよ、今ッからお連れ
なさいましッて那の女がいつたとき、清は黙つて居たさうだに、憎
い口だらうではないか。ぐツと捻つたつもりだらうけれど左様は行
かないやね。(俺も觀世友房だ、嫁なら紋着の一枚も着て来てくれ)さ、
これで、ぐうの音も出さず、そちこちする内勝手にまごつて居りや、
立働の邪魔にされる、座敷へ出りや、佛様の前で小突かれる。清が、
まごつくして茫乎突立つて所在なさに手を合はせて居た、袂を引張
つて、那女がね、外へ連出してしまつたとき、其ッ切、そら、お召

がないや、昨日のおとむらひにも立たれないし、今日の灰葬にも來
なかつたらう。人づきあひが出来ないア此處のことだよ。ほんと
に人間まじはりも出来ないやうなものだ、犬、猫、畜生同然のもの
だアね、其の亭主なら矢張畜生さ、父上が又、操の嫁になんて申
にも程のあつたものだ。汚らはしい、お前も又そんなものを清ッッ
ていふんぢやアないよ。御身分にかゝります、ほんとうに家來衆
の前もあるからね。あ、と獨で領いて、少しはしゃべりくだびれ
たものらしい。フト心着いた様子で、
「あ、さういやア、お供の人に、お前も茶でも上げると可いよ、
一寸、左様あいひな。」
「はい、と蘇返つたやうに返事をしたお澄は少し横を向いて、
松。」
「へ、と襖の彼方で返事をする。此間母親は件の膝頭へ圓を造つ

て仰向いて、ッンであつた。

「操は、母様。」

お澄は此處ぞと思つて精出して話を轉じたのである。

母親は操と聞くと莞爾として、

「今日は何だよ、徳川様へ父上の代替古に上つたのさ、もう、お前、

代替古が勤まりますよ。年紀は、より二ツも下だけれど……」とま

たいひさうにする、と急いで口忙しう、

「そして、もう歸りますか。」と顔を赤うしていつた。

第十三

「操はもう歸る時分さ、御覽なさい、立派だよ、私の口からいつち

やア可笑いけれど、方々いゝ處ばかりへ出入をするものだから、お

前、おのづと品が備つてね、まア何うだらう、方々のお館のお腰元

やなんかで、ッツと若様、若様ッといふんだとさ、あつとりして居

て、眞個に素人のやうぢやアないやね。だもんだからね此夏中あの

見が藍の匂の高い裁下ろしの、浴衣でお前、縁日をぶらついて居る

と、其處は人情だねえ、子守兒が五六人ひそく附け廻はして、(俳

優だよ、俳優だよ)ッていひ合つて、操がね、お前、極が悪かつたど

さ、争はれないものだよ。お前はさうやつて立派な奥様になるし、

ほんとうに、(松や)といふと何か見識がついてる、私さへ、(けい)とい

ひ度くなるぢやアないか、づいと鱗がついたんだね。拜み度いやう

なものを着てさ、此間又帯が出来たつてね、春はまた三枚が見もの

だよ、父上はね些ともお構ひなさないけれど、操がね、自分の

働で以て種々拵へたさ、藝人のこつたからッてね縹袴の袖裏は紅い

ものをつけたさ、容子か好いよ、もうく方々上る處で可愛がられ

るとさ、操、操ッて目黒の御前様なんぞ、そんなものぢやないのだ

よ。御晝御飯も何だとき、お部屋様とも御一所には召食らないのに、
まア、勿躰ない、内の探とおさしむかひで、御膳の大きさも同一だと
ね。お腰元が四五人でお給仕をするとき、そして洋食だつてね、ス
チウとかの、お汁を落したつて、お前、過日も仙臺平の折目高なの
へぼつくさ、厭ぢやアないかね。でも樂だつさ、お前もお食らだ
らう、何うだい旨いだらう。」

「何ですか私はいたくまません。」

「左様だツけ、お前は一躰野菜ものが好きな性だ、だがねえ、澤山そ
んなものを食べてお前づん／＼太らなくツちやア不可ないやね。前
にも旦那様が、澄も申分はないが、もう少し肥ると可いツさ。左様
いやア、お前。」とあらためて娘の顔。母親此時は件の額つきをしな
いで、心から親の情を籠めたのであらう。

「何だかお前やつれてるやうだね。」

「昨晚寝ませんので、」とお澄は然も申譯をするらしく、澄まない顔
をして慌しくいつた。

「左様、ぢやアまア、可いけれど、ほんとにお前清のことなんか、
どやかう思ふんぢやアないよ。あんなものが親類内にあるといふば
かりでも肩身が狭い。大山路の御臺様でさへ此節は辻車だのに、お
前のは、お抱、平どん、松どん、仲働ね、御飯焚、書生さんが二人、
それだつても奉公人の内なら何うして本郷の旦那の家と大した違ひ
はない、結構な御身分だ、清なんか一躰ものをいひかけられるわけ
のものぢやアなからうではないか。」

「松」と急に何か思ひ出したやうに呼懸けて、お澄は座に堪へない
で立たうとする。

襖をあけて、

「唯今、母様。」

お澄は蓋し父親肖であらう、今歸つて来たのは母親に肖た二十ばかりの少年、黒縮緬の羽織ぞろりとした服装、濃い紫の縞袴の袖口をちら／＼と見せた、やさ形な、色の白いの。奥の紅裏も差覗かる、之が母親のいはゆる、若様で、浴衣を着ると役者に見える、お澄の弟の操である。

この少年を左に控へ、彼の美人を前に据ゑて、母親は大得意。「まア、左様かい、何うもお澄あれだからね、將軍様が、お前、操、其あつゆは何うだつて、上のお室からお聲をお懸け遊ばしたとき、勿躰ないねえ二十人も居る中で、取分けお前に、まア、其は、むい、綺羅、星のやうに居流れた處で、何うも何うも。」と調子づいてあたりを見たが、ほこるべき他人が交つて居ないので、母親は物足らず、爰に於てか思ひつく、長火鉢の上に出して土産の蒸菓子——松、竹、梅。松は牛皮で、梅は紅の落鴈仕立、羊羹に竹の節、薄黄色に葉が

透かしてある。

「何うだね、之を一ツづゝ分けやうぢやアないか、ちやうど三個、數も揃つてるから、皆にソレ、松と平どんと内のばあや、何うして皆が拜むことも出来るもんぢやアない、私達は始終頂きつけて居るから、此處でお茶受けにするのは惜いやね、ね、其が可からう。」

「私なんざア、と若様は唯其だけを言つて澄して居る。」
「あゝ、と上調子で、母親は襖の方へ仰向くと、例の膝形で指の圓

「は、何、松や。」

「あのウ平どんに左様いつてね、あいで、此方へお入り、ばあや—ばあや。お前もあいでよ。うむ。」
黒鷗仕立の四十ばかりな車夫の平さん真先で、お松が續き、あとか

ら騒り出たのが此家の婆や。

第十四

長六疊の上手に火鉢を据ゑた、正面に母親あり、むかひ合つた後姿、少し腰を浮かして顔を背けた、お澄、斜めに坐つて膝に手をついたは若様で。横に箆笥が二棹、方々から到來もの、菓子、玉子の折、紙の箱に入つた細德利、お歳暮と札のついたガス焼の急須、鹽鮭は壁へぶら下げて、母親が又凭う飾り立てたものだから堆い。

其の積上げた高低一樣ならない、節季の到來ものに影日向がある、釣洋燈の向ふの柱時計はいま正に七時半。

三人は繋り合つて下手に控へる。平さんは揉手をして、
「へい、徳川家の、へい、大變なもんでございますな。私ア元の家業を遣つてます時分、エ、ナニ、植木屋の手傳なんで、家業冥利に

ね、親方と同勢三十五人で野州へ其の仕事に参りやして、へい、草鞋がけで何でさ、日光様の奥の院まで参りました。何うして其節アお大名様だつて階から跳足ですぜ。平の草鞋は奥の院の土がついてるツて、方々で拜みましたよ。え、大概の瘡なんぞ、其奴を戴かせると治るツてね、繁昌したもんでがす。其將軍様のお菓子。へい、と掌に載せた羊羹をどみかうみて、割膝で、もじくして、恐入て、慎んで感に堪へる。母様、得意の時。

「恐入つたもんですな御先祖のお墓所の山の地でさへ、憑物が除きますのに、何うもねえ、若旦那は、將軍様の前にお坐りなさる、でものをあつしやる。お菓子、其奴を私が恚うやつて、何うも御時節とは申すもの、え、へい、何うだい」と見返つて、

「お松どん、お頂き、頂いて食べるんだぜ。」
「可いから、お頂き」と母親もまたり顔で聲を懸ける。

と奥様の方をむつと見てあたりを見廻はした松は目鼻立くつきりとした色の浅黒い、鼻筋の通つた、口は少し大いが引締つて伶俐さうな、生際が少し亂れた髪の濃いのを引詰めの銀杏返、くるくど目の大い毗の切れ上つた、小股のしまつた、この姉さん年齢十七。千束町で育つて、山を見ず、海を知らず、水は角町の總井戸の水が好いことと思ひ、旨いものは金鑄と心得て居て、一字も讀めない、其癖玄關の書生が小生意氣な事でもいはうものなら、江戸ッ見たと極めつける。

芳原に奉公をして居つたので大店の遊女の部屋部屋へ親元から届く諸國の名産は、真先のあすそ分けて、不殘知つて居る、お前さん方ア臆をくらつたら、松ちゃん、松ちゃん、松ちゃんと、三度口の内でお唱へなさい。名のある遊女が此方に向いて下さいますよ。こんな鬚武者の盛所で御飯を頂くわけぢやアないけれども、私の可愛い

兄さんが、軍人になつて居て、是非堅氣の奉公をしろといふから来た。愚圖とどいやア今ツからでも二代目の丁山さんの所へ遁げて行く、今度のは年下だから私の方が姉さんだ、と人前を憚らない氣遣もの、大難物。

併し風が悪いといはれるけれども、老人の居らない屋敷、特に澄の氣に入りで、松で無ければ夜が明けないから、旦那様も大目に見て置く。

この姉さん件の落馬仕立の赤いのを拜領して、何こんなものをついふつもりで傍の方へ差置いたが、あまり傍のものが騒がしいので、怪しげな目ツつきでじろく見た。のせた紙の端を指でおさへて、「ぢやア、あの、お稻荷様のお供物ですか、」とわツけもないこと。母親より先に平さんが驚いた。「お供物?、何をいつてるんだ、え、、おい、徳川様から下すつた

お菓子だよ、難有いと思ひえね、申戯ちやアねえ。」

「はい、どいつたが何か抜けたやうな返事で一向要領を得ない。」

「真個に下へ置いちやア罰がわたるぜえ、頂きねえッてことよ。」

「は、徳川様ッて何なの。」

「何なの」と思はず鷄鷓返しで平さんは目を睨る。

「己の草鞋は大概の瘡が落ちた位なものだ、お墓所の土でせえ其だ、

可かい、其何だ、將軍様だよ、分つたらう。」

「おまじなひなんですか。」

母親は堪りかねて、

「いゝえさ、舊はね、この丸の内のお城に居らしつた、この日本中

の……」

と赤くなつていひかけるのを、お澄が一寸遮つて、

「阿母様、松にやア分りませんよ。」

「だつてお前、何だつて、將軍様は」といき張つたが、凡そ手真似でも、顔色でも、提灯に釣鐘でも、鯨に鯢でも、釋迦に提婆でも、この形容は飲み込ませることが出来ないで、身悶をして見たが、出ない、出ない、出ない、形容が出ない。種々苦しんだ揚句、これならばと思つていつた。

「お前、まア、一番えらい者は何だと思ふね。」

「それは先の丁山様ですわ。」

第十五

お松は臆面も無くいつて退けて自から大に其の意を得たる趣であつた。

お澄の母親は極めて案外、丁山といふのは前の關白太政大臣とも覺

えぬから怪訝な顔をして、

「何だね、其の何だつけ、先のそれ、」

「は、丁山様。面と向つて済したものなり。」

母親は耳を傾けて、やう／＼名を覚えて、

「丁山さん、何だね、其は、」

「まア、御新造様、あなた！」

お松がこゝで目を睨つたのは、前刻に徳川家を稻荷様と渠か間違へた時の母親のそれと、粗似て居たが、お松は却つて餘りだと思つた様子で、呆れたやうなものゝいひぶり、

「だつて、あなた、源のお職さんぢやありませんか、ねえ。」

「え、お職だえ、遊女かい、おや／＼おや、まアとはかり譬へやうのない當違ひで母様駄りとなる。蓋し敵を知つて兵を施すの計、丁と張つたら半と出て、一番のみ込ませやうと思つて、先づ其の世の中に於て渠が最も尊敬するものゝ何なるかを聞いたので。」

凌雲閣が高いといつたらウシニヤ清水の舞臺は其よりも高い、其處から飛んで下りるといつて人を驚かすことが出来ますよ。然るに、目高が太いといふものに、其より大いといつた處で、鯨の身の大きさが分りますか。

借問す、おめえ世の中で何が難有いね、言の下でへへへ、女にもてた時でえ、と答へるやうに生れついて来た平助でさへ、これには一驚を吃したか、難有がつて頂きかけた蒸物を掌にのせて差控へ、肩を斜にして苦り切つて、お松を見て、

何をいつてるんだな、此女は、途方もねえ、徳川様だつて云やあ、稻荷さんかといふし、瘡のおまじなひだと云や、供物かツていはア、將軍家ツて何のこつたといふ人だから、からもう分らねえ是非も無えわけだけれど、何もお前すて鉢になつて女郎を引合に出してくれるにやアおたらねえぢやアねえか、積つたつてほどのあつたもんだ

な、考へて見ねえ、たかい賣物、買物だ、浮川竹の勤の身よ、鐵槌の土佐衛門といつたものだ、聞きねえ、歌舞の菩薩の音楽のさ、花ふりかゝる仲の町ぢやアねえか、お前なんざ分るめえが、一夜妻といつてな、え、あ、い。

傍聞をしながらお針婆は横をいいてクス、お澄は尋常なり、若様も母親もひどく頼母しがつて力を入れて見詰めて居る、ト平助は御馬前の矢を取る意氣込、固くなつて、

「そら、一夜妻といつてな、抱れて寝らア、な。可いけえ、抱いて寝りや一晚でも媽だといふこつた。お前、錢さい出しやア、私だつて抱いて寝るぜ、かう平助の媽を、お前、誰が日本一のえらいもんだと思ふんだ、つもつたて知れらアな。」

「誰が、平さん。」

「馬鹿アい、大店だつて何だ、二米でいけなきやア歩で買はア、

鹿の子のへりどりなら三步がものだ、錢次第ぢやアねえか、俺だつて、

「御申殿ものよ、虫の好いことをいつてるわ、ほ、ほ。」

「何を！と平さんは膝頭で疊を突いて些と憤氣。

「だつたつても、濟すして車夫の顔を見て、可愛らしく、

「可いのよ、多度可愛がつても貰ひなさいよ、ほ、ほ、とお松は兩袖をひつたり顔に押着けて又笑ふ。

「然うよ、可愛がつて貰はねえでよ、たかい女郎ぢやアねえかい、生意氣な仕打をすりや若者に談じつけて恐れ入らす分のごつた、仔細はおるまい。」

「そりやね、でもね、あの河岸裏を歩いてね、煙管の雁首で襟首を引掛けられて、突然割床とやらへ驅上つた時とは違ふんですよ。」と

ボンと參ると、平さんびたりと眉間を當てられた形で、いやな顔を

して、

「くだらねえことを云つてやがらア、くだらねえ。」

「だつても、お前さん、いつかも然ういつで居たぢやアないかね。」

「生意氣なことをいふない、小兒の癖になんてツたツて、えい、い、

風船は何うして上るもんだか知らねえだらう、開けねえ奴ぢやアね

えか、疝氣の薬は何うして拵へる、知つてるか、フンべらぼうめ、

と横を向いて、仰向いて、大きにむくれる。

「そんな薬は遊女だつて拵へやしませんや、ねえ、篠山さんのお松

さんと婆やは穩に中へ入つて、

「そりや若い衆さんも何だけれど、又お前さんも分らなさ過ぎるよ、

いくら天朝様のほかは無いたツてもお前さん、日本に生れて將軍様

を知らないといふ人がありますか、むかしそれ高尾といふ遊女さへ

秤にかけた黄金で身軀を買はれて、お前提斬になつたものさね。」

第十六

然うだ、然うだ、鯨鯢の提斬、釣斬といふのはそれから發明をし

たもんだ。遊女と鯨鯢、こいつア可からう。臆を釣つてぶら下つて

ら、あいつが女郎の化たのよ、と平助は威勢よく振返る。

「まアさ、黙つてお聞きなさいましよ、可いかい、女中さん、其ね、

仙臺様が何だといふと其の將軍様の御家來だよ、若い衆さんと御内

の旦那様のやうなものさ。まア、譬へていへばだよ、何うしてなか

くそんなものぢやアないのだけれども、何だつてお前仙臺様は伽

羅で拵へた駒下駄をお穿き遊ばしたといふんだもの。」

「其でも日光様のお前、階から先は跣足の部だらう。私アね、職人

冥利でお前奥の院へ草鞋がけさ、伽羅の下駄ぢやアないけれども、

土がついたお庇にやア大概の痣は落ちたもんだ。」

「あれ、又、其だからおまじなひと間違へますよ、まアさ、私のいふのならば分りましやう、高尾を買つたのは仙臺様、其の御主人が徳川様、何うだ、ねお松さん、といふと、少し考へる、薬は利いて来たと見て取つて、若様は膝を向けた。

「其から何だよ、第一早い處で、松や、お前の御主人の篠山の旦那は、其の仙臺様の又御家來なんだ、ねえ、母様。」

「然う、然う、然う、然う、」と尻上りの早口で母親は乗つて出る。

「然うだよ、其で分つたよ、ちやんと分りました。」と母親はしたり顔で嬉しさう。

「厭、皆様でぐるになつて居るんだもの、可加減なことばツかし、」と受けさうな様子は無い。

「じれつたい人だねえ、何うもくく、」と母親は貫目のある膝頭を上げたり下げたり。

「それぢやアお松どん、慥ういふことにしやう、早い談が、まア、其位な、それお前が誰よりも何よりも一番、いちいばん、えらいと思つてる遊女が、可いかい、親方さ、内證の御主人に天窓が上りますかい、御覽なさい、これ、早い談が、遊女より其方が一枚方上手ぢやアあるまいかね。」

お松はちやんと成つて、

「御氣の毒様ですよ、はア、あのね、内證の旦那にだつて誰にだつて私の遊女は仰向いてものをいひましたよ、お氣の毒様。何がえらいたつて丁山さん位えらい方は無いのですよ、だつて私がさう思つたんだから爲方がありません。ほんとにあんな氣前な方は無くつてよ、いつかも表二階の突當の欄干に長繩絆一つで立てたわ。私が角町の天水桶のうらを通りかゝると、(松ちやんや、チヨイと寄つといで)と然うおいひだから、(はア後に)つて急いだの。(あらお遊ッてば)

(後に、)強情だねえ、(だつて)急ぐもの、(是非)厭よ。(何うしても) (あい。)てつた切私もすね氣よ、驅出して行かうとする。上から、ずんと投げて落したわ、カチリッて足下へ。(それを)上げやう、何うだい、それならお前さんの足が留まるだらうッていつたから、顔にね、袖をめて、驅出してつたの。八分玉だつて、何だつて、誰が替ぐらるで留るもんですか。あとでね遊びに行つた時、私が悪かつたつてあやまつてね、あらためてくれたの。あやまつたからえらいと思つたんですわ、何もねえ、天窓を下けたからッて、えらくないッてことはないぢやありませんか。嘘ならお目にかけてまじやうか、何てツたつてえらいんですよ、癪に障つたら御勝手になさいな。其氣焔穩ならずと見て、お澄は横顔を見せて、目でおさへた。

「松、」

「まア、可いやね、」と母親は以ての外和らかだつた。

「かういふのは能くいつて聞かしてのみ込ませるのが、殿様への忠義だ。打棄つて置いては濟まないやうな譯さ。」

「されば御新造様え、惜いことをいたしました、若い衆さんの其の草鞋があつたら、頂かせて遣りまじやうものを、さうすりや、ごんなのも治るかも知りません。」

「違えねえ。」と平さんは膝を一ツ丁とやつて反つたものなり。

若様は應揚に、微笑を含んで、

「それよりか、まア、其のお菓子を取くが可いさ、おあがり、」とおつしやる。

母親、「お頂き、平さんが、頂きねえ、婆やも、お頂きなさい。」

お澄は取繕つて、「松や、お頂きな。」

松は、黙然として、

「………」

「差うつむく。」

第十七

「よう、お頂きな。ね」とお澄は此間に處して頼むやうに繰返した。

「はい、」

とやうく答へる、とまた念に入れて、

「さア、可いから、」

「私は、あの、澤山でございます、と阿松もお澄のいふことなり、びんしゃんとはゆかないので、さすがに憚つたか、遺瀬の無いやう。片手をもじくと膝について、片手の拇指のさきと人指で、圓いものを拵へたり、睨いて見たり。

「澤山ぢやアないよ、そりやお前厭なものはお厭で可いけれど、慥うなつてはものが然うかには置かれませんか。我儘ですよ、お前、私は直接の主人ぢやア無いけれど、お澄もあゝいふものを、いえ、

奥様もあんなに仰有るものを、何處までも我意を立てられて見た日にやア、此家の内はまだしもだがね、他所外へ行つた時のお伴先が案じられます。後々の示しにならない、さア、おあがりお食んなさい、と母親は威丈高といふので、身が据り、両手をかけて灰の中へ火箸を突込んでいふ。

「第一勿躰ないよ、徳川様の御菓子にこだわりをつけるなんて御罰のほども恐いことだ、」と婆やおつくと口の裡。

「阿魔、畜生、お許とありや、腕をウヌ捻上げて、泣聲を立てさせる分だけれど。」

「可いぢやアないか、目をつぶつて吞込んだつて、其が何も毒になるものではないし、」と若様もおほせある。

「厭、厭、厭てッたら厭、何だい、私はね、こんなものは嫌さ、いやですよッだ、虫が好かないからお断り申します、勝手にあしなさ

いな、と松姐え、口を切つた。

婆やは吃驚して、何といふ口だらう。

「お澄」といつて、向直つて、じつと見る母親は目を据ゑて、

「いゝえさ、篠山様の奥様、誰があんな口を利かせて置くのさ、よ

う、いはして置いても可いのかよ。」

「姉さん、とこれもねつツリ。篠山六平太の夫人澄子堪りかねて、

「松や。」

「頼む、御免下さい。」と恰も此時、玄關で高い聲。

いきり立つた母親は耳にも入らず、お澄は其處どころではなかつた。

若様が聞つけて、

「お客だよ。」

一同其方へ耳を向ける。又、

「御免なさい。」

「はい、お客だよ。」

「どれ、と膝をついて曲つた腰を立てやうとする婆やを、手拭を畳

んで持つた左の手さきで後さまに一寸おさへて、

「私が出ますよ。」とお澄が身繕していつた。

「何、お前。」

お松は立構で、「私が、

「一寸参まじやう。」と平助も出さうにする。

「可よ、わざつと、あのお取次がして見たいの、づゝと立つて、

「久しぶりですわ、ねえ、母様。」

「あゝ、久しぶりだ。」と見返つて母親は急に相格を崩して莞爾する。

「来たなあ、誰だか冥加なもんだせ、奥様のお取次といふのを見ろ

よ、まア、可いから。」

「御苦勞様でございます。」とお松も顔を上げて手を支へる。

「姉さん。恐入りますな。」

お澄は背負上の水淺黄、襦袢の帯のお太鼓の結目のふツくりした上に、小さなかたばみの紋すらりとした後姿三枚襲の裾を捌くと、かはり裏がこぼれて出て、疊のへりと十文字。蹠甲の筭キラリとさせ、うしろを振向き、目のふちを染めて、微笑して、

「厭よ、お前達は。」といひすて、玄關へする、くく。

肩、腕、腰、首など思ひくく持上て、私が、手前がと、取次を争つた一坐の者は、是にて坐を直して居住居を落着けた。婆や、まつ御新造の色を伺ひ、

「何うもく目が覺ますやうでございますよ、眞個にあなたお嬢しうござりませう。」

「何ね、慥ういつちやア可笑いけれども、あれでも、ま、ま、何だよ、私が産んだのかと思ひますよ。」

「飛だとをおつしやる、へへへ、」と仰山な、平公天窓をびたり。「いえ、全く旦那様の御威光さ、人間よくなるも悪くなるも一寸の間だ、一分間、」と指二本並べて一寸ばかり隔て、火鉢の上へ出して見せた。

「ひよいと間違ふとね、浮む瀬がなくなり、彼でもね、従兄妹同士でお前、幼馴染の、おなまけ様の、意氣地なしの、女郎買の、穀潰しの、下手書工の處へ嫁きたがつたものさ、一寸の心懸よ。」とて件の指を鴉鍋の尾を振る形で、ひよいく。

第十八

「おてつけて云んぢやアないけれども、ほんとうに徳川様のお菓子頂かないなんていふ心懸では末が案じられます。若い人がさう強情ではないけないのさ、其ね、清といふのだつて左様だよ。矢張華族

様が嫌な男だ、御覽な、向ふでも惚れ切つて、こがれ抜いて居た癖に、あの娘とも一所になれずさ、誰がまた大切な娘を貧乏な下手書工などにやるものかね、へまむし入道だ、お氣の毒な譯さ。

「御尤もでございますよ。」

「それでねお前、女郎なんぞ引摺込むで寝そべつてるツさ、乗鉢だらうよ。ちやんと分つてるがね、其男にお前、將軍様のお菓子を取つていつて御覽、誰かど同一やうに屹度文句をいふよ、厭だなんていふよ。そんな心懸だから人間交も出来なくなりませ、フン、」と例のソレ仰向いてツンの眸にござりまする。母親は餘憤未だ去らずであらう。

聞く内に色を作した、お松はツイと出て、

「もし、」

「うゝえさ、お前のごツちやアないのだよ、誰が篠山さんの女中だ

どいひましたよ、フン。」

お松は北叟笑をして、

「あめでたいのねえ。」

「あめでたいッて、何が、何があめでたいのさ。」

「いえ、其の清さんとおつしやる方は、あの奥様の從兄で書を遊ばす……」

「其が何うしたのさ。」

「其ですよ、」と乗つて出て、

「其方ですよ、私の丁山さんの遊女の情人は、嬉しいねえ！」

「何だい、そ、それかい、」

「丁山といふのは、あや、驚いた、何の事つた、馬鹿々々しい、何だ、あの、意氣地なしの面汚しの、貧乏人の、」

「しよびツたれの、下手書工の、」

「可うございますよ、はア、意氣地なしの、面汚しの、貧乏人の、」

しまひつたれの、下手書工でも可うございますよ、何だつてね、私の遊女が、若旦那にばかりは、天窓を下げましたよ。去年の春ですよ、二日の晩に入らした時に、ひきつけて、明けましてお目出たうございますって、遊女が丁と、手をついていひました。はじめていすわ。

だつて出世だの、立派だの、私が産んだやうぢやアないのって、いつて居らつしやるけれど、眞實だわ。家の奥様は、をばさんの産んだ女のやうぢやアなくってよ。嘘だと思ふんなら、聞いて御覽なさいな、奥様はね、あの遊女を羨しがつて居らつしやるの、そして丁山さんといふ方は、良月日の下に産れておいでなすつたつて然ういつちやアね、泣いたり笑つたりして居らつしやるわ。私と大の仲よし。何時でも、あの、傍へ寝かしといちやア色々なことをお聞きだよ、若旦那ね、遊女と、あゝいつた時にやア慥うだつた、あゝだ

つた、なんてつたやうな事をいつでもですよ。源ぢやア毎日のやうに遊女の處へ遊びに行きましたし、清さんも毎晩のやうに來て居たんだから私皆知つてるから皆聞かして上げるの。どんなに羨しがつて居らつしやるだらう、何にも口へ出しちやアおつしやらないけれど、私ちやんと分つてるわ。ですから此處へ清さんを連れて來て上げたらば、と思つてね、時々お可哀想なの、私ア誰よりも我まゝがいへるから、今度いつて遊女に然ういつて清さんを借りて來て上げましやうかつていふと、恐い顔をして叱るのよ。だつてね、何うせ出來ないこつたけれど、そんなことでもいつて居なくつちやア滅入つておしまひなさんですもの。奥様に聞いて御覽なさいな。こんなお菓子はお奥様も矢張欲しくはない方の方ですよ。それを、あの何にも知らないで、いゝ衣服を着て嬉いかの、奉公人が大勢居て威張れるだらうなんのつて、私ヒヤ／＼しましたよ。をばさんはドヂだ

ですからね、間違つたら御免下さいまし。今晚は、と尻上りにいつて調子を低うし、

「人をつけ、一昨日業平橋で逢つたんぢやアないか、身装が悪いと、知らない顔をすら。貧乏はしないもんだぜ、お寒い。フン時節だ」とおつしやるだらう。はい、お寒うございませう。誰方でも可うございますから取次下さいまし、滑でございます、叔父様にでも叔母様にでも一寸お目に懸りたうございませう、

「はい。」といつたが震へないで居らるゝものか、母親が悪口雑言、自分に聞いても辛いほどであつた、ありつたけの蔭口を、不殘立聽でもされたやうに思ひ取つて、敵の子と枕を並べて寝た處へ、親の幽霊が血だらけになつてあらはれても、慥くまでには驚くまい、お澄は色をかへたのである。

「はい」つたつて、もう手数が懸りますからね、念の爲に申しますが、

一寸と謂ましてもお玄關で立話ぢやア不可いので、此づつたいでもつて、お館の其のね、お疊の上いソレ輝を引懸けながら推上りたいやうなわけなんですから、宜しく申して下さい。申儀ぢやアねえ。寒くつてならねえ、何うかしてくんねえ。後生でございますから、何うぞお屋根の下へソツとお入れ遊ばして遣はされまし、かやうに震へてをりますやうなわけだね。あい、滑が震へてるんだよ、お澄さん、どいつて胸を斜にしながら、滑しい目で屹と睨んだ。邪慳にされても生命は入らぬ、といつたやうな中なので、お澄は何か穩ならぬ、一通でない、ものありげな、滑の様子をうかいつて、丁度來合はせて居る私が幸。事となつたら縫着いて、ぶたれやう、叩かれやう殺されて死でしまはうと、悲しさと、懐しさと、怨しさに胸を据えた。お澄は坐を開いて、障子の蔭に、横に構へる。籠洋燈の薄ぼやけたあかりが届く、見附の袂が二枚ばかり、銀の浪立わくがキ

テ／＼する。

「何うぞ、此方へ。」

「何、上りましてもお差構ございませんかね、ソイツア難有えや、意氣地なしの、しよびたれの、下手書工に上れとおつしやる。冥加に餘った事ツた。何だ、これが不可いといつたつて指を脚へて歸るやうな氣の利いた御人躰かい、へむ、お氣の毒様だよ。ずん／＼勝手に繰込まア、餘計なお世話だ。」といひながら清は外套の鈕釦を外しかけて、背後を見向いた。

「おい、入んな、入んな、上つてもい可ッてよ。差構ない、通して遣らうと仰有るんだぜ。誰が何といつたつて構はないよ、當家のお娘様だ、何うして篠山様の令夫人、澄子の御方お許しだい、びく／＼しない、つゝと入れよ。畜生、氣取るない、玉手御前。」

「可いの、兄さん。」

「よ、來ましたね、兄さんとお在なすつたよ、秀調引 一寸首を縮めて莞爾。」

また媚いた聲で、

「入つても可いんですか。」

「可いッてことよ、何を所作ツてるんだ、早く來な。」

第二十

ばつたり傘をすぼめた氣勢、さア／＼といふ雨の音、コト／＼とすゝる下駄の響、からりと格子戸を開けると、中腰になつて、結立の高島田を、まどもに見せながら俯向いた形でづつと入る、水際の立つた婀娜者あり。傘を立懸けるト會釋をして、

「御免下さいませよ。」

「なんていつじやがら、狸め。お、痛え。」
 「お氣をつけなさいよ。あの、兄は喰酔つて居りますので。」といひながら、清を横に見て目を配つた。
 既に戀人の此のしだらにさへ、小な胸を蕪かして、もうく命懸けで居るものを、意外な連のあるに吃驚して、涙にうるむだ目を睨つて、これがソレだと見て取つたらう、可羨しく、可嫉しく、またなつかしい糸次の丁山。
 術なさうに笑を合んで、
 「結構でございますわ。」
 「こいつア御挨拶だ、恐入ります、と身体をふらくとやつて揺り落した、外套は昆布のやうな裏を翻して、よれく式臺の上へとぐるを巻いたが、尾は土間へぶら下つて、殻を脱いだ清の姿は更に驚くべきものであつた。」

驚くべきといつて急に錦を飾つたのでもなく、又ぼろを下げたわけでもなく、鎧を着て居たでもない。何事もないが、但素肌の上へ襦袢一枚、雪のやうな禪も見える、やゝ其膝のあたりまで布で蔽つた兩脚はむき出で、搔合せても胸はあらは。白地の手拭を一重後から巻いて、一結前で占めた、渠を弾劾する叔母さんが第一に非難する其袖が美しい。姿と顔どかほどまで似ない人の、清は眉目俊秀なる一個白面の好男子、筆を取つて、山を描く山を描けば山に靈あり、水を描けば水に神あり、花を描けば心あり、月を描けば情あらむ、江月照松風吹、永夜清宵何所爲。
 清は手を添へて、件の手拭を締めながら、またフツくと呼吸をはづませて、よろけ込む。續いて丁山、肩掛を疊に脱がうとするト清は立つたまゝ見返つて、
 「あいく、不躰な、何だと思つてるんだ、五月雨になるとかひが

生へやうと云ふ長屋とは障が違ふよ、小汚ねえ。そんなびしよ濡の
肩掛をお前、此家様のお疊の上へ脱いで堪るもんですか、土間の隅
へ束ねて置きなよ。誰だと思ふ、其處に見て居らつしやるのは當館
のお嬢様篠山の奥方だぜ、お前にやア小姑にならうといふ人だ、鬼
千正といふがね、何然ほど邪慳な方でもないよ、大概甘えんだけ
ど、そんなことア是で叔母さんには云ツつけ口をしやうといふ人だ。
氣を着ないど、お前、兄さんが迷惑するぜ。

「あや、然うでございましてたつけねと屈んだなり腰を引くと後へ脱
いだ、これは薄紫の紋着、ほかした裾模様のことぼれ松葉の間から、
かつ散る紅梅の長襦袢、雪なす爪先もほの見えて、遊女鮮麗にこそ
顯はれたれ。
「妹です、」といつた人は酔ッてるからびつたりと坐つて、ぐツたり
頭を下げたが、又呼吸を吹いて、目を据ゑて、顔の遣場もなく困ず

るお澄を、むつと見て、故と慇懃だ。

「え、かけ違ひまして未だお目に懸りませんが妹です、乗次ツて
いひます、はい、本名は丁山、狸とも申しますよ。何でえ、妹だ
つてお前より年ア上だぜ、あゝ見えて婆とだね、行年積つて二十五
歳、中年増ですよ、なんてづゝと色氣のあるつもりさ。何卒私同様
に、フン私同様に何だよ、又陸軍歩兵大佐從五位勳四等、金鷄勳章
功四級、強がりの薩摩ツぼといふのに寝返つちやア怨だぜ。何の事
アない、お前なんぞ、かけがひのねえ江戸ッ兒の癖に、田舎者の顔
立をして江戸式を打毀さうといふ人だ、お頼ん申しますよ。中隊進
め——だ、てけれツつのばアだ、今晚は、」といつてちやんと手を着
いて、お辭義をした。
「さア、何卒、まあ、此方ちやア何ですから、あなたも何うぞ、彼
方へいらしつて下さいまし。」

何と心を決したか、お澄は此時陸軍大佐の夫人であつた。

第二十一

「はい、何方へなりとも参ります、え、もうお邪魔になりません處へづらかります、糸次、さア、御免を蒙らうぜ、どっこい」といひさまツツと立つたが、横様に玄關脇の八疊の室へ倒れ込む、どたばたり、どむ。

「兄さん危いわ、あれ」といふので丁山もつかくど立つて入る。お澄は顔を上げて錦繪のやうな其の後姿を一寸見たが、膝の上へ手を重ねて、開放した、吹曝しの、寒い敷居際に立派な服装で悄然と首を低れる。

「何うしたの、何うしたのさ」といふのが聞える。

「突飛したんだ、突飛したんだ。ひどいことをしやアがる。豪傑の

媽、ア力が強いや。あ、痛え、何、痛かアねえぞ、痛かアねえぞ、生意氣な、こんな愛目を見せませうだ。清は中音で細い節、

「こうんな、愛目を見せませうだ、みなア自からがいたアブウらアかアラ、まづいな。みいな自からがいたづらから。何だツけな、それから、」

「知りませんよ、何處だと思て居らつしやる。」

「伯父貴の家さ、ちゃんと心得てら、心得て居りますよ。何も義太ツたつて仔細はあるまい、謠だつて淨瑠璃だつて、そりやてんくが好くだ、何もこれを將軍家の御聞に達しやうといふんぢやアなしさ、好ですることツた、構ふない。そりや是非六平太でなくツちやアならないのもあるし、不思議なもので、清に限るといつたやうなのも在でなさるぞ。」

「清さん、清さん」と耳に口。

「ふむ、ふむ」と鼻いきやら返事やら、清は大呼吸を吐いて居る。急に静まり返つて、

「清さんてば、」

「うむよ、」

「可いんですか、可くッて、」

「大丈夫。」

「だから、言はないこッちやアない、私もうこんなことが無きやア可いがど念じて居たのに、生憎又、来て居るんだもの、でしやう、好器量だ、若いのね、些と困つたよ、少し相撲が違ふやうだよ、お氣をつけなさいよ、口惜いねえ。」

「何、何、何だ、何だ、婆の癖に、氣の少いことをいつてらア、御申殿もんだぜ、おい、花は種くといふのをやらうか、よさ來い、よさ

來いは何うだ、あゝ、よさ來い、よさ來い。」

「申殿ぢやアないよ、これで又、お前さんが見返るやうなことをすりや、心得てるよ、よ、帯の間に持つてるから、」

「何だ、何だ。」

「あれさ、些とばかり切れるものさ。」

「うむ、氣は確、氣は確、」

「後生だよ、私もう死にまうよ。」

「殺しッちまへ、」と急に聲を高うして、

「わゝ、暗い、真暗だ、真暗だ、酷いことをしやアがる、お客様をくらやみへ置くのは、何といふ御流義だ、家元は違つたもんだ。酷いなア、黒白も分らねえ、六道の辻だコリヤ、おい、己ア死んでるのか、活きてるのか一寸見てくれ、まるで分らねえ、真くらだぜ。」と足をばた〜。

これに吃驚してハッと心着いた、お澄は前刻つらあてがましう、故
と板の上へ脱いで行つた、清の外套を取入れやうとして、手に取る
と、放れがたなく、思はず抱いてホロリとして、我を忘れて居たの
である。片足は式臺に、片足は敷居の内に、悄然して、チラ／＼と
風に瞬く籠洋燈の灯と一所に、お澄は身うちを震はしたが、二人の
を取入れて、静かに洋燈を持つて入つた。颯とあかるくなる、八疊
の片隅に膝枕をして居た清は、慌しく身を起したが、胴震をして、
「あゝ、寒い、あゝ寒い。」といふかと思ふと、呵々と笑つて、自分
の口で何をいつてやアがる。

第二十二

程もあらせず、婆やが桐火桶と坐蒲團とを運んで出たがきよとく
して兩個の珍客を見て、黙つて引退つた。婆やが火鉢と坐蒲團とを

持つて来たことを、敢てこゝに断る必要はないけれども、以て奥な
る母親の大に穩な仕打がお澄の胸に入つたので、別に立つて行つて
取打をして、策を講ずるまでもなく、其儘其處に坐つて居ることが
出来たやうなもので、推するに等どはたきを以て顯はれかねない口
振だつたのが、人知れず慙る舉動に出たのは、蓋し存分其の棚下を
して居た當人の清に對して、大に打てた氣があつたのであらう。
住居が極ると、清はちゃんとなつて膝頭を揃へてびたりと兩手を据
えたが、少しぐたりとした怠けたやうな形で、
「えい、早速ですが、伯父さんは御内でございますかね。」
おろ／＼据眼で顔を見られて、灯の蔭にもはゆげな、お澄は面を
背けながら、指を反して、

「生憎出掛けましてございます。」
「はゝア、お留守、」といつて耳のさきをつまんで俯向いた、清は手

拍子で股を一ツ。

「トそいつア弱つたな、いや、伯父貴め、風を喰つたかい、お澄さん真個だらうね。」

「はう。」

「いやに疾えな、まだ何とも言出さない前だ、こりや逃げたんぢやアないやうだ。」

「何でございませうか、朝ッから参りましたんださうぢや。」

「なるほど、いや、可うがす、叔母さんは無論其のち内ぢやう。」

「はう。」

操様はえ。

「さつき歸つて参りました。」

「なるほど」と、腕を組むと白い額に柔な黒い髪がかゝつた、しばらくして顔を上げる、目のふちは未だ濃い紅。

「徳川様は何うだね、」と唐突に言出したから、お澄は一寸返事を殺して、

「はい。」

「將軍家に於かせられての事よ、矢張時々お成かね。」

「如何でございませうか。」

「なるほど只今では六平太將軍の御内室だ、實家方の様子は悉く御存じないと、いつたやうなわけだ、なるほど。」

「……」黙つて俯向いて袖を膝の上に折重ねる。

「さてハヤ、やつとことごと先づお疊の上を拜借したし、やうくの思で灯にもあかりつきましたやうな事で。いや、何うして、お蒲

團もございませうなり、お火鉢も頂いてをります、いえもう何うぞお構ひ下さいませんやうに、決して其の將軍家のお菓子だの、宇治から御到來のお茶なんか、お櫻應には及びませんから悪しからず、何、

お辭義をいたすやうな氣の利いたのぢやアございませぬ。なんていや、いゝ氣に成つて打棄つとかア。お澄さん、お冷を一つ下さいな、硝子盃に一杯位下すつたつて可いでしやう、

「何をちつしやるのよ。」とさすがに傍から取なし顔。

「いゝえ結構でございますよ。唯今、どいつてしとやかに立つて出る。」

「おい、眞個にお冷だ、生意氣に温湯なんぞ持つて來ねえが可いぜ。」

清は目ませをして片類に笑み、丁山を見返つて極低聲、

「何うだ旨えだらう、我ながらひねつたもんだぜ。フ、ン、」

「當前だわ。お人品な、お嬢様の、然もお前さん、惚れてる弱味の

あるものを掴へて、ねぢるんだもの、誰にだつて出來ませアね、」と

前刻から濟まして飲むで居た煙管を斜に下げて吸口を上げた。

「わ、」

「まかし、眞個に少し薄ら寒くなつて來たぜ、」

「其處が御辛抱さ。」

「だつてね、これでじつと堪へて居るんだが、些とたまらないよ、」

震へちやア方なしだしな、

「強情な方で齒の根も合はないぢやア眞個に方なしさ、」

「それにね、もう何だか草臥れて酔つた所爲か切なくツて不可え、」

「ちよいとお膝をとお行きたいやうだグ、」とばつたり着いた手を、

叩き拂つて、突起した、丁山はしやんとなる。清身を起して、

「どッこ、」

「お巫山戯でないよ、まだ談をフツ切りもしないで、眠いもな、」

「んだ、しつかりお爲なさいなね。」

「心得て居ります。」

第二十三

「何處だと思つてるのさ、此方が憊うやつて出て来た上は御親類内ぢやアないよ、お前さん敵の家だよ。敵の中へ入つたと思つて居なくちやアならないのだから。ちやんとして出よ。いまに又何んな對手が出て來やうも知れないもの、お澄さんぢやア談が分らないとさ、ほんどに頼母しくないねえ。」

「大丈夫だよ。何。」

「口ばかり大なることをいつて、一瞬まア、そりや何といふ圖なんだね、變にかしこまつてお尻をもじくさして居るよ、私厭だよ。それに帳尻のばれた番頭さんが追出される時の様に、襦袢一ツなんだもの、引立がないよ。」

「馬鹿ア、いへ」と煙管を構へて片手を袖の中へ入れた、

「これでも禪がぐツと占つてら、」

「さうさ又、それで、紐が弛むでりや、丁山が暇をつかはす。」

「御意で、と軽く受けて済まして居る。」

「あれ、申殿ぢやアない、お前さんあぐらををかきなね、ぐツとさ。威勢よく、」

「可いやな。まア、」

「可かアないよ、そして度胸を据ゑなくツちやア不可いよ、何だつて百兩ばかりの仕事だもの。よう、」

「實は、其ね、僕は甚だ極が悪い、と吸口を頬にあて、清が俯向く。」

「あら、ま、厭だよ、厭ですよ。お澄さんの前だもんだから、異う済ましたがるわ、はい、何うせさうでございませうよ。」

「御意で、」

丁山は眞顔になつてきツと見た。

「厭に氣が強いねえ、可いよ、さア、させずにヤア置かないよ。」
「痛え、」といふのをキツカクに煙管を放り出すと、清はどつかりと
あぐらを掻いた、

「音羽屋！」

清は襟をしごきながら、手拭の端を前で占めて、

「あいらん何うだ、此處へ惚れ直しちやア、」

丁山は煙を空さまに吹いた。

「御意で、」

第二十四

「可いから、まア、お前出ておくれ。さからつちやア悪いから、あ
ゝ、鼻ツ先が強クツちやア、母様の出る場ではないから、」と母親は
突伏したお澄の、其の背を搔撫でなければかりて居る。

「後生だから、まアお前可加減におしらつて置いておくれ。其内に
は此方での工夫をします。」

「だッて母様、」とばかりいふ聲もうるんだ。

「さア、分つてるよ、分つてるがね、生憎父様もお留主だし、私も

唐突だから仕様がないやね、むかふの出やうが一通でないからね、

うつかり口を利くと藪蛇さ。可いから、まア、口惜しくツても辛抱

をして、頼むよ。さきはね、もうくお前には、其の、何し切つて

居るのだから、對向ぢやア鉾先が挫けないでさ、此處は一番、と母

様は蛭の腹を剝返したやうに、べろりと變つて、大に氣を揉む。

「もう、何でございますよ、こんな時は受身になると一割損が立つ

ものでございますよ。上手に出て捻返してお遣りなさりますのが宜

しうございます。ほんとに見たくでもない、飛だ汚はしい真似をな

さる、とちつきあひか不知、婆やは中腰でぶつゝいつて、目をきよとく。

「何うです、お差支がなけりや私が抓出しッちまひましやうか、生白い野郎の二三疋、譯やアありませんせ、然も一人だ、と平助は腕を扼る。」

「まアさ、お前、」

「何だつて奥様にお手敷か懸るやうぢやアお供をして参りました私が濟ません、」

「まアさ、」

「いえ、合點ならねえでがす、何の腕づくなら、さア、來いだ。」と平助はくの字形に身悶をして力む、こんなのは人が宥めると威張るんで、いざとなれば、けれどもも申すよ。

「そりやアね、お前さんの手に合はなけりや巡査、何うせ仕懸けて

來た事だから落度は向ふにあります、明い處へ出りや土龍ぢやアないが、目も口も開きません。そんな事は分つて居るけれど些とこつちにつもりもあるし、まアく向ふの言種を聞いた上のことにしやうと思ふからね、お澄や、行つておくれ、何しろ深く巧んぢやア來たやうだ、言分に困つて手筈があるからさ、

「は、」

「可いから。」

「ぢやア、アノお茶でも入れまじやう。」

「何さ、お水といつたらお水が可いよ、此方ア煮酢を飲ませたい位なもんだアね。」

「全くでございますよ、私も親類に一人厄介ものがございましてね、もう散々苦勞をした末がこんなにお世話様になつて居りますやうなわけなんでございしますもの、あゝいふのを見ますと、もう、人事と

は思はれませぬ。齒がありや喰ひついでやりたうござります。」
「あゝ、親類を持つのもね婆や、よしおしたよ。」と鷹は濟ましたも
ので、若様は不關焉。

第二十五

「何うしやう、おい、伯父は居ないさうだぜ、嘘ぢやアあるまい、
歸るまで待つて居やうか、それにしぢやア寒さが應えるよ。」

「可いやね、留主なら、其操さんとかいふのを抱込むから、」といひ
かけて煙管を拂いて、

「何うです、」

「澤山だ。」

「はい、誰今お水を持つても出でなさいます、お待遠様、
御意で、」

「あれさ、申殿はよして、」

「む、申殿はよして其の操を抱込むのか。」

「話は其でも分りますよ。」

「はてな、些さうもござりますまいかと存じられますが、」

「何故さ、」

「何故ッて、何だぜ、操は好い男だぜ。」

「其は結構ね、」と落着いて見向きもしないのを、故とらしく流盼に

かけて、

「年下だから、お前、可愛いよ。」

「まづね、」

「清は其腕を突飛ばした。」

「勝手にしやアがれ、」

「叱。」

清さん、あの冷うございますよ、宜しうございますか。
 お澄はもう綺麗に涙を拭つて居た、盆に乗せて差出した硝子盃を透かして、水鏡を見るやうに、二人は顔を見合はせたが、襦袢の袖をふら／＼として、懶うげに手を出して、
 「恐入りますな、と受取つたが、肩を揺つたので、硝子盃が動いた、其の水を、胸の處で、鹽を定めて熱と見た。
 然も毒を入れたのを見透かしたかのやうな、事／＼しい、仰山な、思入であつたから、丁山も差覗く。少時身動きもしないで居た、清は其の秀てた眉を擦めて、
 「こりやお水かい。」
 「冷たうございますよ。」とお澄はもの優しく、何氣なく答へたのである。
 「冷てえなア分つてら、ふむ、お前ノ家のお水は、こんなものか、

馬鹿にして居やアがる、とツ、ケンドンにいふと齊しく、坐中に硝子盃を投げ出した、水は裝上つて楕圓形をなしたと思ふと、さらさらと廣がつた。
 「俺のいつたなア、冷酒のこつたい、ドヂだなア。」と目まじろきもしないでお澄の顔を睨りながら、フツかけた。餘りの事に驚いた色のある丁山のやうではなく、お澄は却つて騒がないで、うしろを振り向いて、落着いて、
 「婆や。」といひかけたが、フト思出したやうに、袂から半拭を出して拭かうとする。
 「小汚え、え、えい、お客様の前へ何だ禪の切ッ端のやうなものを出しやアがつて汚えよ、汚えぢやアねえか、堪つたわけのものぢやアなら。」
 「御覽なさいまし駄々ばかりこねて居らつしやる。」と一寸丁山の顔

を見た、心の内は何んなであつたか、お澄は然ういつて莞爾したが半拭を押隠すと、同時に、三枚の袂を重たげに肩にかけた、桃色と緋と、水浅黄、八口がはらりと亂れて、玉のやうな肌がもれると、雪を欺く二の腕にからんで、血汐を絞れる韓紅の、縹緲の袖は疊にこぼれた。お澄は惜氣もなく其れをば水に濡らしたのである。

「お澄さん、可いや、坐つておくんない、もうお水は澤山です、考へて見りや然うだつて、此上酔つて又肝心な談話が分らなくなつちやア何の事もない。」

清は急に眞面目になつて、

「お前さんから然ういつて貰ふとしゃう、伯父さんがお留主だつて分らうと思ふがね、又分らないツたつて譯がつかなきや歸られないんです。一寸お聞及びでもあらうが、一昨日の晩だね、おぢいさんの通夜の時だ。こんな御覽の通りの不束もので、裁縫は出来ずね、

から役去者で始末にをへませんからして、平に先づ御辭退を申したけれど、斷つて仰有るので、まア、種々いひきかしました。」といひかけて丁山を見返り、

「これも、それ、操様とぢやア二ツばかり年上なり、第一我儘に育つたもんですから、胡座掻いて、立膝で、鍋焼を突き合はうといふおつこちなら知らぬこと、格式のお蒙い、其の御當家、何だつて宗匠の家元だ、將軍家とおつきあひを遊ばされますやうなわけで、可いかね、お澄さん、と馬鹿念を入れてかゝり、

「然ういふ御邸の若様とは、こりや誰の口でもいふこつてすが、釣合はぬのは不縁のもつた、殊に又、行届いた、御上品な、御位の高、御容色の好い、何さ、姑があらつしやつて見ると、あとあとが案じられるといつて、ぢぶくりますのを、一萬石、兄哥が威光であつ伏せたもんですよ。かう見えてもね、家を出る時や涙でさ、お察

しなすつたつて可い位なもんだ。で、やうく談は極りましたが、此處なんだね、それ、何しろ、將軍家とおつきわひを遊ばさうといふ御當家だ。たとひ平ッたく親兄同士で相談を極めた、親は泣寄どいつたやうな嫁にもしろさ、友房の悴に、下締と半纏で與入はさせられないと慪うおつしやる。道理のこつたから倒になつて引振つて工面をしたけれど、此方人等の身分ぢやア、何うして紋着たア届きませんや。それがツて引退つちやア私も何だか先祖に濟まないやうな氣がしたから、一番酷工面の無理算段、何が酷いたつてお前、御覽の通り手前がソレ細紳一ツ、

兩袖を引張つて、清は俯向いて、見惚れたやうに露出の膝を視めながら、
「まだこれだけぢやアありませんせ、道具は勿論のこつた、家アまゐるでがらん堂、引窓の細まで引纏めて、賣るやら曲げるやら、曲げ

てあつた物の受出しの、分を取つて賣り飛ばすといふ、いやもう、面目もない次第で、やうく天窓のものから慪うやつて八紋の足袋まで穿かして、兄さんが、召連れて出ましたやうなわけです。何うぞお奥へ然様お取次下さいまし、叔母さんは疾くに御承知だらうと存じます。何だか斯うお見受け申した處では、お澄さん、あなた御存じないやうでございますな、何もあなたを、嫁にとり、また婿にとでもいふのぢやアないから、極を悪がると思つて黙つて居らつしやる譯もなし、いや、全くまだお聞及びは無いのかね、
仕方がないからあたりまへに、
「一向存じません」と口の裡でお澄は答へる。

「はてな、そいつア分らない、
「そりや何なんてございませしやう、これが何も終始此方にお在遊ばす方ぢやアなし、御相談といつた處で、ツイ一昨日の晩のことです

もの、まだお二方からお話なさいます間がありはえまますまいよ。」と
丁山眞顔で口を添へる。

「左様かも知れない、いや、大に左様だ、全く其に違ひはないぜ。」

「ちやア、まあ、何うぞ一番其邊を宜いやうに早速お前さんからお傳
へなすつて下さい。お澄さん恐入りますが。」

「あの、私から」とばかりでお澄は餘りの事に立ちかねる。

「あなた、お氣の毒さまでございますね。」と丁山も小憎らし。

「お早く願ひたうございますな、これだから」と袖をばたく、

「お察しなさいよ、お推量下されませだ。」といふ口を。お澄は何所
までも慇懃に受て、おひしらひ、

「それではそんなに申しまじやう。」と力なさうに立つて行つた。

襲衣の振は亂れたまゝなり。

丁山は見送つて、

「清さんお前さんは何う思ふね、」

「何だ。」

「私は可哀相になつて來たよ、素人衆といふものは何所まで彼んな
に出来るんだらう。」

「何が出来る。百兩か、」

「あれさ、早耳だね、いゝえ、お澄さんさ。可愛いちやアないか、

何も向ふへまはつて、腕をまくらうといふ對手ちやアないから、氣
が揉めなくつて宜やうなもんだけれど、人情だわ。私も始はお前さ

んを見棄てたと思ふと、小癪に障つたね。張も意地も御存じなしか、
素人といふものは、皮ばかり堅くつて、餡子が餡へてる、しつきり

のないもんだ、だらしの無いもんだ、臭いもんだ、と思つてさ。義
理で、そりや、仕事師とても突走つたのなら、探し出して、姉妹分

になつてやらうが、襟元へついて金子のある、身分の好、髻が處へ

片づいたと思やア、くだらな過ぎて不惚だけれど、不惚だつて癪に障らなかつたに、何うだらう、今のアノ容子の好ことッたら。あゝは私たちにやア出来ないよ、清いもんだ、美しいもんだ、これがお前さん、あんな仕打を私たちにさして見たが可、譬ひ死ぬほど惚れて居たつて、屏風の外へ投出して、此方ア空舩、氷のやうになつて這込む時、占上げて、あやまらせて、ぐうの音も出さしはしない。我まゝをいはしちやア、野郎の方が附け上る、示しが利かないつたもんだに、私アつくく、感心したよ、よく、まア、あれまでに思はせたね、考へて見りやアお前さんも罪な人だよ、色男だよ。」

「些相談が出来さうかね。」

「そりや出来ます。」
「ぢやア何も女房ばかり守つてるぢやアなかつたに、惜いことをした、實のこつたが、編絆の袖で拭かれた時は、肝先へ針を刺れたや

うだつた、堪つたもんぢやアない。」
丁山 慌しく睨んで、「あや、」
「だつて私ア何も口へ出ていやアしないのに、」
「はい、思つてりや澤山ですよ。」
入交つて。操此處へ、着流で、しよたりと構へ、据腰、摺足、氣取つてツイ。

第二十六

伯父さんがお留主だつて可うございますよ。生憎だから談が分らないツておつしやいますけれども、相談はちやんと出来てるんですよ。」と丁山は立直つて、操が方へ取つて懸つた、敵来よ、組まむと、さつきにから、舌を滑らかにし、氣を鋭くして、待構へて居たのであるから、堪つた分のもにあらす。

「だつたつて、可ぢやアありませんか、私はね、操さん、あなたが相手なんてすよ、叔母さんだの、貴下だのが、不可いつて、故障をおつしやれば己の女房にしても可からど、伯父さんはお約束をなすつたんだけれども、考へて御覽なさいな、もう五十近いぢやアありませんか、可哀想だよ、お察しなさいましよ。」とづるくど寄る其勢、殆むど胸倉を取らないばかり。母様の令に依つて詰所に罷出て、操の驚きやうは一通でなく、

「何も彼も留主のことだから、」
 「お留主、難有いねえ、其のお留主が此方では附目なんてすよ、あなた、あなたが、まア、急うやつて顔を見せて下すつて、伯父さんがお留主といふのは、神様のお引合はせよ、眞個だわ。ねえ。」と操の震へ上る膝を押へつけた、此手は心得たものであるから、五寸釘で打着けたるに異なるなくて、(あどすざりしりごみ)といふことさへ

坊ぢやんには容易に出来ない。

「伯父さんが在らつしやつても、私は斷つちまひますよ。あなたのやうな方を傍へ置いといて、何うしてあんな皺くちやと寝られるんですか、お察しなさいなね。」

「私は何にも知らないから、」
 「知らないからさ、私が教へて上げましやうといふんでさアね。夫婦になつて御覽なさいな、はじめの内はね、あなたの様なのは震へるもんですよ……。」

「おい、早くしてくれ、此方ア寒くツて震へて居らアな。」
 「嫌だよ、邪魔をしちやア、いけないねえ、さアよ、ちやんと話を極めてしまはうぢやアありませんか、そしてあんな人は早く歸してしまひましやう、何うにかしてお遣んなさい、だつて、あなた、あゝやつて、私の支度を捨へるのに、身ぐるみ脱いで居るんですもの、」

あのまんまぢやア歸れませんやね、此方ア、伯父さんが居なけりや、あなた、あなたに嫌はれりや伯父さんと、兩天秤にかけますからね、これが又出直せの、日が悪いから延ばさうのと、そんなことを言はれて歸らなけりやならないやうな當のない處へ、思ひ切つて、憊うやつて、來るもんですか。可愛がつて下さいな、とゴム人形と弄ぶ氣で、ぶり／＼して居る操の身体へ、手をおつ／＼けたり、顔を乗せたり、膝頭で小突いて見たり。お尻を一ツ叩いて見たり、どぎまぎして、おど／＼して、額を撫でたり、耳を抓んだり、手の甲で顔をさへたり、五躰を悶へるのを面白がつて、丁山は可氣晴。うつかりからかつてる背後の方、障子越に半面を出した、お澄は低聲で、しのびやかに、手招して、「清さん、清さん。」

「あなたは、私を、何う遊ばすんですよ、」とお澄はくらがりの中で

清に縋つて、わつと泣た。清は、婀娜たる其棒組が敵の緋緘を組敷いと、たどはし手玉の如くおしらふのを見て、馬鹿／＼しくもあり、をかしくもあり、見のも氣の毒で面をそらした、障子の蔭から、白い手と、うるんだ、美しい、双の目で、引附けられ、手繰寄せられて、うっかり座を立つと、廊下を越えた園の中まで纖弱い人に引立てられて、振も切られず思はず連れられて來たのであつたが、聲を立てられて驚いて黙つた。「……………」

「清さん、」
「清、」出すべき言もなし。

「私は、あなたのやうぢやアございません。其はもう口へ出して申しませんことが、お胸に入りますことはございませぬから、無様にか、思ひひがめて居らつしやいませしやうけれども、私は、私、私、もう、其時から、心ぢやア死だ氣で居りますよ。まア、憊うや

つて、これだけ申しましたので、大低お察し下さいまし、主人の
ざいますものが、人の見ません處で、あなたにお目に懸りましたか
らには、母様も誰も何とも申しませんが、私は何うなりますか分
りません。何うなりましても、私は何うなりましても宜うございま
すから、清さん何うぞ、もとのお身躰にもなんなすつて下さいまし、
後生でございます。おばさんには大變に可愛がつて頂いて、澤山お
世話になりました、其の、お禮のつもりで、此處で申上げるんで
ございますから、志ばかりもお汲み遊ばしてね、ね、清さん、後生で
ございますから、もとのお身躰にもなんなすつて下さいましよ。
とぎれ、とぎれにいつたが聲も震へて、赤心は見えるやうに聞こ
たのである。

第二十七

「もうそれだけでございますから、彼方へ在らつしやいまし、私は
篠山のものでございますから又あなたのお名にても障りませと悪う
ございます。可うござりますよ、可んですよ、私の事は些とも構ひ
はしませんよ。」
これを、これをして昨日にあらしめば、頃刻の前にあらしめば、清
はあひ變らず日頃篠山に嫁したお澄を取扱ふと同一舉動を爲、同一
ことをいつたであらう。けれども既に既に硝子盃を投げたのに對し
た、優しい仕打に、心から動かされて居たのであつた、其上この言を
聞かされたのであるから、前後も堪へ切れなくなつて、
「堪忍したまへ、ど力を籠めていつた、清の聲も沈んで居る。
堪忍したまへ、五年が八年、當家と行通をしてる内に私ア後前に
ない、たつた一度の我儘だ、ね、可ぢやアないか、私ほんな我儘
もんだ、随分世の中にやア誰にだつて憚らないで、好な真似をして

居たけれど、此家ぢやアいつも姑を持つた繼子のやうに、小さくなつて氣兼ねばかりして居たよ。何の所爲か、お澄さん、お前さんが然ういつてくんなさるなら、私だつて何にもいはないが、可ぢやアないか、堪忍しておくんさい、たつた一度のわがました。」としめやかにいつて、宥め且つすかしたのである。

「そりや、もう何を遊ばしたつて、斯う申しては母様に濟みませんけれども、其を私が申すのではございません。私のやうなものが口を出しましては、嘸生意氣な、自分は何うだ餘計なことをと、あつしやいましてやうけれども、清さん、おうるさうございましてやうが、私は、アノ澄は、おなたの思つて居らしやるやうぢやアございません。」

「分りました、そりや分つたよ、私も思違をして居たつげ。」
「いしえ、そんな事を、何も、今晚のことを申しますのではないの

です。母に何をあつしやいましてやうとも、毎日のとではなし、つた一晚、もう、恚ういふ氣になりました私には何でもないのでございませぬ、ですけれども、何うしてまア玉川様のお兄様が其様氣になり遊ばしたかと存じますと、それが悲しうございませぬの。

おんなに頼母しがつて、樂みにして、喜こんで可愛がつておいでなさいました、おばさんが草葉の蔭で、何んなお心持でしやうと存じますと、私はもうく身も世もございませぬ。」

すしり泣の聲がした。
清はしばらく黙つて居たが、

「何、其なら大丈夫だ、よく分つた、お前さんの御親切は忘れやしないが、可やね、構ふもんか、世を隔て、居て、仕業で見せるより、間違へば直ぐにも死んだ母様の傍へ行つて、膝の上へ突伏してあやまッちまうから。」

「え、小見の内だつて覺えがあらア、随分おいたをして、何んなに叱られたつて、泣いてあやまれば、堪忍して下すつた、私は左様思つてるよ、許されなことをした處で、親ばかりはあやまりさへすりや堪忍するね、申譯がなくなりや、思切つてさうするまでのこつた。悪く思はないであくれ、お前さんの心は分つたよ、清は難有く思ひます、そりや清のこつた、清だと思うから舊の身に魂を入れかへろなんて、いつてくれるんだらうが、其の清は何かしてしまつたんだ。何うかしてしまつたんだ、からね、此野郎はこりや悪たれの役去者さ、伯父の處へゆすりかけやうッて奴だ。清ぢやアないんだよ、お澄さん、あいつはもう馬鹿でね、先方の心を汲取られなかつたもんだから、僻んで、恨んで、疾に何うにかしつちまつたんだから、お前さん、もう氣にかけずにおくんなさい。些どもそんなものに氣お

つかひをするにやア、當らないんだ、可や、又折があつたら分るやうに左様いつて聞かして遣らう、聞いたら後悔をするだらう、口惜がるだらう、残念だと思ふだらう、おかし喜ぶに違ひない。然うすりや私も嬉しいや、ね、お前さんの心が通りや、何んなに喜ぶか知れやしない。」
お澄は告別をするやうに、
「ありがたう存じます、」といつたが、もう泣音も立て得ないで、くひしばつた。
「お澄や、お澄や、」と母様の大聲に呼ぶ聲が暗黒の中を傳はつて、冥途へ導びくがごとくに響いた。

第二十八

國の暗中のさゝめごと、これが、別だらうと思つた、姿は見えない、

なつかしい、ものゝ氣勢のお澄に放れて、思切つて玄關脇の八疊へ引返した清は、フト見ると一驚を吃して思はず逡巡したのである。たとへば次の室の襖を左右に押開いた片隅に屏風を立てた中から蠟燭の火先がちよろ／＼と壁を舐めて線香の煙が三筋四筋、色ある系遊の如く亂れて立つて、外面に一脚一閑張の机を据ゑたのに、鉢のもの、銚子などならべ置き、ぐるりと環になつて控へたのは、叔母、婆や、平助、見馴れぬ男が別に一名、また上座に大胡座で、肥大な身の幅充満に座蒲團にとツかと乗つた、豹の額、獅子ッ鼻、象の眼、鰐の口、猿の耳、猪首で、牛の如き大男、腰の周圍十圍にして、脛の太さ一抱に餘れるものあり、諸君これを見て驚いて以て誰とかなす、武州牛門矢來の人、性は篠山、名は六平太從五位勳五等金鷄勳章功四級陸軍歩兵大佐である。

一場の光景疑らくは人の屍を守つて通夜するものゝ如く、然り而し

て此方の籠洋燈の傍には、如何にかしたる丁山悄然と影暗く坐して、其の膝にツイ居るは、又驚いた、これ清が嘗て掌に据ゑていとをしまし、床の女郎花の根占の撫子、土手で育つたお松であつた。

「よう、おいらん、おいらんてば、黙つてないで、文句をいつてお遣んなさいなね、口惜いからさ、あのお髻は、あれ、いつか、お前に通つて振飛ばされて、大一座の前で、車もいけないう前さんに口を割つて飲ませて、病氣にしつちまつた武左ぢやアありませんか。皆でいろんなどをいつて、叫きおろすのに、よう、後生だから、おいらん、文句をいつておやんなねえ。聲が似て居る似て居るとは思つたけれど、まさかお前さんが此家へ來やうとは思はなかつたのに、騒ぎになると然うなんだもの。さつきから、私がお前さんを一番えらいといつたつて、皆でいろんなことをいつて、理屈をいつて、分の分らないことをいつちやア私を遣込めたぢやアありませんか、皆

でいちめたぢやアありませんか。よう後生だから敵打ちをしておく
んなさいなね、といひく、膝の上へ膝を乗つかるやうにして、縫り
寄る。

丁山は恰かもその時鳩毒を仰ぐより辛いと、何時もいひくした酒
を無理強に、藝者、幫間、新造、茶屋の女など十三人、唾を集めて
膝つて居る前で、六平太が其の一點の朱唇に押附けた硝子盃の口か
ら、満を引いて瞑目した時と同一姿で、手を肩のあたりへさし入れ
て、少し首を低れながら、口を結んで、咄を上げた、衣紋がゆるん
で、彩美しい縞袴の袖は、懐にした其の手先を包んで、膨らかにほ
の見える肩は脱けて、雪の如き領長く、襲着の袖はだらりと下つて
身動きもしなかつた。

お松は斜めに乳のあたりへ横顔を押當てながら、
「よう、何うしたの、おいらん、お前さんにも似合はない、あんな

ことを謂はれながら黙つてゐることがありますか、ねえ、チヨイ
と、一寸おいらん、といつて願の下で頭をあちこち動かしては、丁
山を右膝左膝で、ちれつたがること大方ならず。

第二十九

「何うだいまア、あの濟まして居ることわよ、太くしい。」
「今戸焼の姉さんにあゝいふ形のがございますよ。」と平助と婆やは
相槌を打つた。

「おかし、何うも壓の強いのは感心しました。あゝまた膽が据ら
なきや容を手玉には取ません。いゝえさ、彼れまでになるのには修
業が入ります、水本とやらに九年と何ヶ月居たといひますからね。」
「其がもう何でございますよ。せめてのことに遠引でも知つてれば
可うございませすが、色男で候と何の事でございませしやう、生白いひ

よるひよろ奴を縋袢一個で引張りまはして、能くも明るい處へ出られた義理で、ほんどに梵天國にだつてあんな圖はござりませぬよ、真個に、

「あゝ、はゝア、あゝはゝア」とづんぐりした太い聲で六平太は笑壺に入つて、くらつて居る。

「婆やのいふ通りだよ、苦勞人だなんて廓者はもう些少働があると思つて居たら、見下げ果てたものさ。長屋の女房達だつて亭主に襷を下げさすのは連添ふもの、恥だ位は知つてますよ。それも面目ないことを知つて居て、世間に顔出しも出來ないといふので、雨戸でも占めて引込んで居なさりや、其處は人情だ、これが他人といふぢやアなし、身内のことであつて見れば、不便にも思はれる、小菊の一帖、手拭の一筋や、籠甲色の石鹼位、貰いで遣るまいものでもないが、圖々しい、二人づれで、もがり、かたりに推込まれては、

「お茶一ツだつて遣る氣はしないよ、何うだい、まあ、あゝやつて壺に根を生やした様子ツたら。」

「何もう腰が抜けて立てねえでさ、恐ろしいもんだ、旦那様の御威光だね、へ、へ」と鼻のさきで平助は笑ひ上げる。

丁山は見るく血の色を失つたがお松は聞くに堪へず赤くなつて、

「口惜いわ、あいらんじれたいねえ、何うかしてお遣りよ、お前さんは何故然だよ、よう、何故然うだよ。むつとして居るからさ、寝そべつて、あやんなね、寝そべつてさ、はらん遣になつて、後生だから、足太鼓を打つておくんな。足太鼓を打つて、頬杖をついて、よう、願でしゃくつて、顔をすくひ上げて、お國ものがつて云つて下さいな。何故黙つて居るのよ、口惜いぢやアありませんか。大勢だつて、お前さんが好きな野晒の襦袢で、煽つて遣りたいわねえ。」

「女郎、何うにかせい、あゝ、いかにか、あゝ、駄目ぢやらう、ぐうの音も出やせんが、あゝ、ははゝ。と六平太寛々たり。

丁山色を作して、慌しく、其裾を歴へたが間に合はず、氣嵩もの、お松はむくと起きて、かゝつた手鞠の如く小取廻し、美しく六平太に飛んでかゝる。

「巫山戯けるない、阿魔ッ女め、と平助の、握拳を胸先に受けてアッといつてよろけかゝつた。倒れやうとした力ない身は、此時堪り兼ねてズツと出た滞の手に支へられたが、上ずつて人の境もなく、武者振りつかうとして、振返つて、血眼で、

「若旦那！」

第三十

「清さん、大失策だつた、不可いや、もう歸へりましやう。私が坊

ちゃんをつかまへて因縁をつけてる内に、伯父さんもお歸んなすつたやうだつたが、むかふぢやア用意が出来てね。そりやアもう主人が留主でも、一旦お約束を申した事なら始末をつけて嫁に引取るわけだけども、何しろ先刻急病で亡なつて歸つたから仕方がない、葬禮と興入を、ちゃんぼんには出来ないから、たとひ支度をしやうとつて、福祥一ツにおんなすても、家財残らず賣つておしまひなすつても、道は歩かれなくつても、時の不祥だ、仕方がないど、あの逆原風まで建て、置いて、御親類も御同席の上であつしやるの。

ねえ清さん、まさか伯父さんが死んだといつて、逃げるとまでは此方も思附かなかつたわ、兩天秤で間違のない處、父上さんに遣る分と、暮の凌位はつけやうと思つた、飛だも茶番にしつちまつたよ、仕方がないやね。いひ分はあるんだけれど、丁山ともいはれたものが、情人の立過しも出来ないか、福祥一ツで引張出したと然ういは

れりや一言もごさいません。はい、誰方も失禮をいたしました、飛
だ世話場の遣そこない、相棒の清さんにも云譯のない次第だ。私が
一生にたつた一度、天窓を下げて、容色わるく、立場なく情れ切つ
て引下ります。松ちゃんや、お前にも云譯はないよ、堪忍してよく
れ。其替り屹度……いしえさ、何にもいはないで歸るんだつけ
さア、清さん。
清もお澄に腸をえぐられて以來我にもあらず茫然として居るのであ
るから、前後を思ふ進もなく、恥も外聞もあらばこそで、只管我ど
我身を陥入れたこの虎穴を免れやうとして、頷いた。
二人が立たうとすると急はしく母親は敷居際に膝を進めて、
「待つて下さい、ま、まア、待つておくれ、今お前様方に歸られて
は佛の前が淋しくなります、いえ、佛様が怨みます。親身の甥御だ、
またお前さんは姪だ、甥だの姪だのがお通夜をしてくれなくって、

他所から誰が来て通夜をまましやう。お氣にも入るまいけれど、叔
母が頼むから人様の前もある、勤めて居て下さい。何かお前様とは
私の氣の合はなかつた事を、死んだ佛様も知つて居ましたから、私
の行届かなかつた所爲のやうで、佛様に申わけがありません。いつ
もは兎もあれ、死んだ人のためだもの、氣に入らない處はおわびを
する。私が行届かない段はあやまります、何うぞまアお通夜をして
もらひたい、歸らうたつて佛様の手前、申譯がない、叔母は咽喉笛
へ喰付いても歸しはしなう。
「御道理でございますとも、御新造様も何や彼や、お大抵ではござ
りませんよ。」と婆や、何彼につけて差出ることつた。
「もうね、私は心得違で、何の彼のと云つたけれど、其處は身内だ
ね、清さんが畫を描いて展覽會へ出したと云つて、袴羽織で、お前
様が結つてあつて遠見ぢやアよく見えないからつて、眼鏡まで新しい

のを支度して出かけておいでだつた伯父さんだよ、それにつけても

清は丁山と立つにも立たれず、針の筵に据ゑられた。

「サア、御覽じろだ、これは御通行の方々が夢にもなつて見たいと仰せらるゝ、色男でございでございす。」

立場なく座に就くと呼吸もつかせず彼の見馴ぬれ男が嘸し始める。

代は見てのお戻りでも何でも無い、これは親の因果が酬ひました

わけではござりませぬ。本人の心柄、不便なものでござりまする。

「サア、御覽じまし、家庫を持つた御人、御脩業中の御方、御主人

持は尙のこと、好い手本にあひなります、大小ともに木戸は無銭だ。」

これにも返す言葉はなく繻袷一ツの當人いふまでもないこと、丁山

までが見すばらしく、肩身をすぼめて差俯向く。

「何うでございませしやう、これを見ましてはハヤ、高利貸になるま

でも、色男や傾城になるものでござりませぬ。」

第三十一

「婆やのいふ通りだよ、佛様も結構な甥をお持ちなすつて仕合せさ、何しろ書師だから、お前大したものだね、おいらんばかり描く書師

東西、承りました處では右の色男は書師の先生がなつたのぢやさ

うにござります、はい、はい、太夫姓名の儀は玉川清、

「對手は丁山さ、と母親悦に入つて、まくしかける、ト乗地になつ

て、

「あいやい、對手の女は丁山と申されます。」

居合はすものは一同に笑つた、此といふ。

口上はますます乗つて、

「東西、かやう申しまする内に、男の顔の色が變りまして、震へて来る處にお目を留られまして御一覽。はい来た、ソレ自然天然と震へて参る。女は、あれソレ後毛を啣へて齒をくひしはつて口惜しがります、此處道成寺、明六ツの鐘を怨みの形、後朝の跡とござい、おい来た、」

「チツ、チツ、テケレツ、テケレツ、ドン、ドン。」

平助も負けない氣、やんやと受けさせる積で、此奴が、事といふと隠藝の、馬鹿囃しで間を入れる。

「テツ、テツ、テツ、テケレツテケレツドン、ドン。」

哄と落が来ると口上は有卦に入つて、

「東西、恚やうにいたしまする内に面の皮の千枚張が、御見物のも人数、五人で五枚、十人十枚、御一名に一枚づゝ引剝がれまして、次第次第に薄うあひなり、居堪まらなくなつて参りまする、アレ、」

もじくどいたします、それ、立ちかけます、遁げます、處を、お通夜だと申し、義理詰にいたして立たせませぬ、釘づけにいたして置いて、又々、又々、後から、追々後から、追々。

「テケレツテ、テケレツテトドン。」

「え、さて、まださて、親類縁者を此處に人橋かけて呼寄せますと、一人に一枚二人に二枚、面の皮を剝れまして、しまひの果には、どむ詰には、鼻から血が出て、目からは火が出て、涎を出して、くたばる處を御覽に入れます、東西、」

「あもしろい、あ、は、あ、は、は、と六平太、大口を開て笑ふ。」

「もし篠山の旦那、何うにかしてお遣りなさいまし、然ういたすとまた藝當が差かかりますよ。」
六平太は、願鬘を搔撫でた。

「うむ、あもしろい。」
「おい、来た、おい、篠山の旦那様が右の色男にも盃を下さる處だ、可いかい若い衆。」

「テツテツテ、テケテ、テケテ、テケレツドン、ドン。」
「それ旦那様がお立ちになつた、飲めとおつしやる、こりや飲むまい、案の定だ、あれ御覽じろ。」

「飲まぬか、え、呑め、一盃やれ、あ、断つていやか。」と六平太は渠が十圍の膝を清の前に、どつかと据ゑた。

「さア、色男、困却の躰でござい、アレ、口惜がッても無念でも、残念でも、旦那の前だ手足が出ないや、よい。」

「あは、さア、飲まんなら呑ましてやらう、と熊の如き手を頸へ廻はして清の襟首を無手と取る。」

「それ、横になつて仰向いた、ヤア、眼を瞑つたい、眞蒼だ。」

東西、

丁山思はず片膝を立て、腰を据ゑた。

「さア、飲め、藥ぢやから呑め。」

「清さん、お頂きなさい、旦那の其のお盃を頂くとお前の身躰に血が通ふよ。」

「東西、飲めといつたら呑めいとつしやる、ヤア、口を割ても飲まずと参つた、おい。」

「テツテツテ、テケレツドン。」

清は唇を震はしたか瞑つた目をキツとすると、口の端へおつけた、六平太の猪口を前歯で啣へて手もかけず、ギリギリと噛むだ、酒は覆れ、盃の上で猪口は碎けてバリ、と落ちる、清の唇は碎片で切れて、颯と紅が見えたが、あつけに取られて目を睜る六平太の顔へ、喰欠いた猪口のかげと一所に眞赤な唾をフツと吐かけた。

は腋腹を挟られて仰向けにばつたり大の字。

「手前達は、誰だと思ふ」とすつくと立つた丁山が手なる、出刃庖

丁から血がたらしく、二の腕をかきつけて、糊を切つて、莞爾として、

「丁山さんの遊女だよ。」

屹と胸まはして自若として、朱に染まつた其の出刃の脊を口に啣へ

ると、袖を舉げて、脇の下から兩手を廻はした手さきで留帯をばち

りどはづした、其手でまた下締の端を解きながら、

「私。刃物を持つてるからね、騒立をすると危なうござんす、遁げ

も隠れもしやアしないんだから、一寸静にして居ておくんなさいよ。」

と云う云う帯を解いて棄て、兩肩からはらりと脱ぐと日南の梅の

薫がした。長編神の立姿で、

「松ちゃん手傳つておくれ、」といふので、人心地もない阿松が、勝

氣で生き居てこれも騒がず、いふがまゝに手繰つて出す、水色縮緬

の下締をキリ／＼と乳の下へ巻いた、丁山は、清の枕下へ膝をつく

と、顔を抱いて枕をさせた。あたりにも目を配つて庖丁を下に置き、

脱棄てた紋着、膚の名残の未ださめないのを清の胸へ引寄せて掛け

て遣つて、其胸に手を置いたが、じつとして、死灰の如き頬に横顔

を押あて、

「清さん、寒いでしやう、清さん。しつかりして下さい、清さん。」

返事も出来ないものであつた、まづかりと抱て、

「見ッともないからさ、まづかりするんですよ。」

顔を放して又見たが、鈴の様な目がうるんで居た。フト氣がついた

やうに、

「書は描けますか、大丈夫ですか、」とはつかりした聲でいつた。

言下に清は身悶をして、

「何方だ、お痛まう、何方の手だ、」と微にいふ。丁山は力なげなる、

其兩手を取つて、左の袖を上げやうとする、ト悲痛の音調、

「あ痛、痛。」

色を變へたが屹となつて、

「左よ、清さん、怪我をしたのは左ですよ。」

清はこれを聞くと苦痛の眉を擡めながら、右の手を動かして見た。

擡が開いて、

「左だな、……可」といつて清は纒かに目を開く。ト丁山と面を

見合つた。

「きつと描けますか。」

「左だな、」

「あゝ。」

「可、」

「お前さん、そんな事で取亂して、まづくなつちやア、厭ですよ。」

描いて御覽なさい、私が筆と墨と上げるから」といつて、手早く、
庖丁を拾つた。活きて立つて居る、阿松を見て、目を返して座中を
見て、

「覺えて置け、達引はかうしてするもんだ」と涼しくいひ放つたが、

首を垂れて最後に一目男の顔、丁山は聲も立てず、庖丁の柄に握り

添へた一折の懐紙ぐるみ、乳房のあたりへ突ツ立てると、あはやと

見る間に真紅を染めた。

清は爾時血を絞つた丁山が縞袷の片袖を断つて、五臓六腑を引出し

た如く血のしたゝるのを手に捧けて、其袂四枚に一筆、龍の如く、

雲の如く、水の如く、丁山の姿を描いた、手捧の畫伯は今其名高う

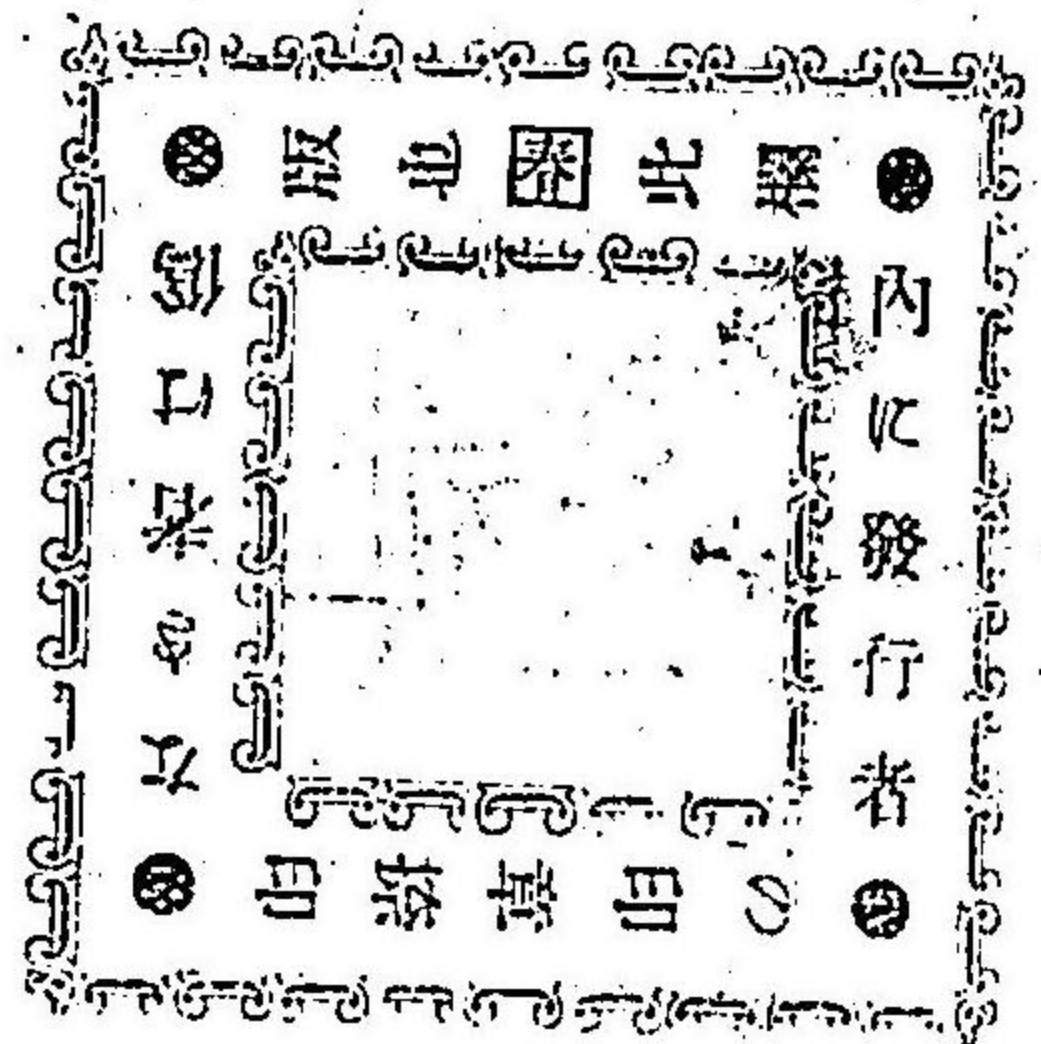
して、袂の血のあどは長く暗中に光あり。

通夜物語 (完)

7-1

著作權所有

明治三十四年四月十六日印刷
同年四月十九日發行



著者

泉鏡太郎

發行者

東京市日本橋區通四丁目五番地
和田 勲 亮

印刷者

東京市牛込區市夕谷加賀町一丁目十二番地
佐久間 衡治

發行所

東京市日本橋區通四丁目角
春陽堂

印刷所

東京市牛込區市夕谷加賀町一丁目十二番地
株式會社 秀英舎第一工場
(電話番町十九番)

通夜物語
實價金參拾五錢

7
1

編 輯 主 任 後 藤 宙 外

新 小 說

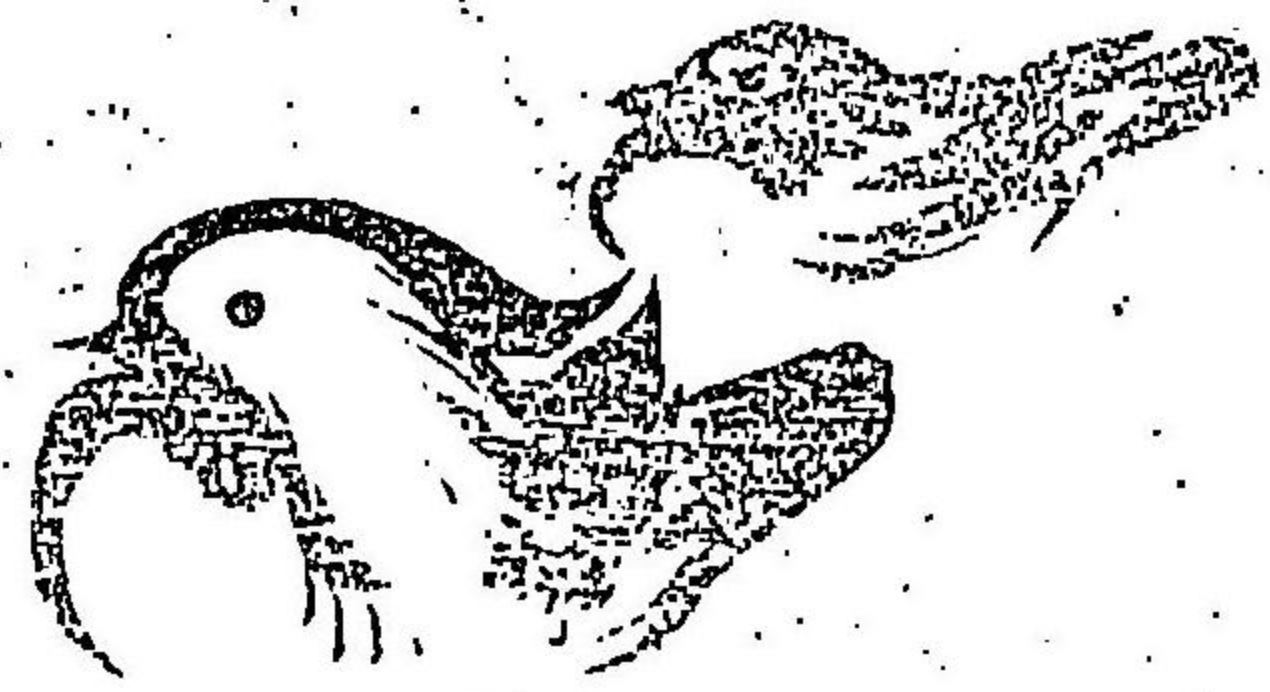
每 月 一 回 廿 五 日 發 行

「新小説」は小説を主とし文學、藝術、社會に關する饒味有益の記事に富む日本第一の大雜誌なり
 ●本誌に執筆せらるゝ諸大家には紅葉、露伴、柳浪、眉山、天外、鏡花、風葉、曙山、春葉、秋濤、鶴伴、宙外その他十餘名あり

小説欄 には毎號長短數篇の作を新舊諸大家に起草せしめて之れを掲ぐ。
雜錄欄 には高尙鉤玄の文と平易饒味の記事とを併載して上下一般の歡迎に背かざるべし。
時文欄 には宙外氏が公平穩健の筆を以て縱横に現時の文界を評論して餘さざるべし。
文苑欄 には諸名流の新詩、美文等を採録し、傍ら寄書の俊秀なる物を併載して光彩陸離。
譚叢欄 には社會各方面に涉りて一代の名家を稱せらるゝ人々の話説を筆記して風趣意氣共に躍々。
諸國噺欄 には全國の名所、舊跡、傳説、口碑、俗語、俚歌、名人の逸話等を募集して掲載するもの。
藝苑欄 には演劇、相撲、落語、講談、淨瑠璃その他百般の藝道に關する多趣味の記事を收む。
社會欄 には社會各方面の鋭利周到なる觀察記を載せ、傳神の挿畫を以て文の足らざるを補ふ。

實價 一冊金二十錢 ●六冊前金一圓十錢 十二冊前金二圓十錢
 ●郵稅各二錢 郵券代用は割増可成一錢二錢 切手に限る

發 兌 元 東 京 市 本 橋 區 通 四 丁 目 角 春 陽 堂 (電 話 本 局 一 十 五 番)



春
陽
堂
版



通夜物語

泉鏡花

「鍋焼鍋」
 駒込白山の阪の上、千駄木へ出らうといふ辻の角で、小雨の中で唐突に節を附けて呼んだ。この聲は、東京の町々、浅草邊、兩國の橋の袂、藝妓新道、場末の裏小路さては大川端、到る處に、戀には限らず、冬の夜を寝もやらぬ、人々の耳に、其の思ふこと、場合に因つて、種々の意味になつて聞こえるのであるが、今しもつひ鼻の前立つて箸につるくと引かけてた壯俊は、何の事もない不意を啖つて、

鏡花小史著目録

通夜物語	照葉狂言	湯島詣	錦帯記
湖のほとり	辰巳巻談	高野聖	黒百合